公開シンポジウム②
部活動で学んだことを語ろう!
ー筑波大学附属高校蹴球部の近現代を中心に

待ったなしの部活動改革が進んでいます。教育課程外であるにもかかわらず、日本の学校教育の中で大きな位置を占めてきた部活動は、以前のままでは存在し得なくなっています。

2017 年 12 月に発足した日本部活動学会の設立趣意書には、部活動をめぐる諸課題として「児童生徒の負担の問題（家庭での時間や自由時間が少ない等）、顧問教員の過重負担、教員の全員顧問制と児童生徒の強制加入、過酷な練習や体罰、外部指導員との連携や質的向上、部活動指導員（職員）の確保、保護者の理解と協力、大会や練習時の送迎の問題、選手育成か教育かという目的に関わる問題など、多様な問題や課題」が指摘されています。まずは中学校から部活動の地域展開が進行していますが、高校や大学にも影響は及んでいます。

担い手が地域であろうと学校であろうと、青少年が好きなことに取り組み、仲間とともに過ごす場は必要です。部活動には「居場所としての意義」があり、試合の勝敗とは別の「何かが育まれてきた」ものと考えます。

本シンポジウムでは、卒業生が語る「部活動で学んだこと」を通して、長い目で見た部活動の意義や改善点を明らかにすることを試みます。主な舞台は筑波大学附属高等学校蹴球部（旧東京高等師範学校附属中学蹴球部）で、今年 2 月に創部 100 年を迎えた歴史と伝統を持つクラブです。J リーグ発足前後から日本サッカーのメジャー化が進む中、同部は、サッカーとフットサル、男子と女子、現役と卒業生が連携するクラブとなり、多様な活動を展開しながらさまざまな分野に人材を輩出してきました。卒業生のコメントと学術的な考察を交えながら、部活動の可能性と課題を明らかにしていきたいと考えます。

シンポジウム終了後は、同会場にて懇親会を企画しています。部活動のいまとこれからを、多くの方々とざっくばらんに語り合えることを願います。　（中塚義実）

公開シンポジウム2024-2報告（月例サロン通算337回）

部活動で学んだことを語ろう!

ー筑波大学附属高校蹴球部の近現代を中心に

髙橋　正紀　岐阜協立大学経営学部（スポーツ哲学）
朝倉　雅史　筑波大学人間系（スポーツ経営学）
中塚　義実※　筑波大学附属高校／NPO 法人サロン 2002 理事長（スポーツ社会学・教育学）
（※コーディネーター兼）

【主　催】 特定非営利活動法人サロン 2002
【後　援】 日本部活動学会、桐窓サッカー倶楽部
【協　力】 日本サッカー史研究会
【日　時】 2024（令和 6）年 11 月 23 日（土祝）　14：30 ～ 17：00　（14：00 受付開始）
※ 17：00 ～ 19：00 同会場で懇親会
【会　場】 筑波大学附属高等学校「桐陰会館」＆オンライン
【参加費】 1,000 円（サロン 2002 ファミリーと学生は無料）
【参考資料】 NPO 法人サロン 2002 2024 年 5 月公開サロン報告書
「大戦前の日本サッカーと二つのルーツ校ー東京高師と東京高師附属中」
https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2024/2024-5.pdf

＜公開シンポジウム 2024-2 参加者　計 28 名（敬称略）＞

◎は NPO サロン 2002 会員、○は会員外のファミリー、無印はファミリー外（11/23 時点）

■ 会場参加者（計 25 名）　※懇親会参加は 22 名

・登壇者（3 名）… ○朝倉雅史、髙橋正紀、◎中塚義実
・筑波大学附属高校蹴球部卒業生 14 名（氏名の前の数字は卒業回）
… 78 菅原博、80 留岡伸一、103 池田知之、103 嶋田淳、103 木田圭亮、103 横山浩太郎、103 寄田浩平、◎ 104 関秀忠、○ 106 大河原誠二、106 西片淳、111 大澤潤一郎、○ 111 小野塚隼平、◎ 116 柳井隆志、○ 121 遠山諒
・同 在校生 2 名（いずれもフットサル部）… 中川結理（高 1）、志村大輔（高 2）
・上記以外 6 名… ○安藤 裕一、小池正通、◎小池靖、◎嶋崎雅規、○丸山実花、○皆川宥子

■ オンライン参加者（計 3 名）

◎高原渉（宝塚 .F.C.）
浦井智治（NPO 法人吉川みらいのブカツ）
神谷拓（関西大学／日本部活動学会会長）

＜ 登壇者プロフィール ＞

－ 演　者 －

髙橋 正紀（岐阜協立大学経営学部、スポーツ哲学）

1963 年神奈川県出身。神奈川県立厚木高校から筑波大学、同大学大学院（スポーツ哲学）を経て、1987 年から岐阜経済大学（現岐阜協立大）専任教員。1987 年～ 2017 年同大学サッカー部監督 /JFA　A 級コーチ（2012 年総理大臣杯東海代表。サッカーで生計を立てる主な OB：J1 新潟・谷口海斗、REGATE ドリブル塾・奥平卓也、比嘉翔也）

1996 ～ 97 年にケルンスポーツ大へ留学。現地リーグでの Goodloser 体験をきっかけに“スポーツパーソンのこころ”の探求を開始し、2007 年以降体育授業とサッカー部指導で活用すると共に全国各地への伝達を始める。2012 年に講義の効果を「『スポーツマンのこころ』の講義理解後のスポーツ実践が生きがい感と自尊感情へ与える影響」で医学博士論文（岐阜大学）で実証。伝達実績は 2024 年 10 月末で 1,012 回、72,400 人が受講。現在も講演活動を継続すると共に、2024 年 4 月からは人材育成支援を目的とした「ひとつ株式会社」を設立し、さらなる伝達普及活動に邁進中。（一社）日本スポーツマンシップ協会副会長・NPO 法人バルシューレジャパン理事。

朝倉 雅史（筑波大学人間系、スポーツ経営学）

1984 年、東京都出身、実家は文京区小石川（附属高は徒歩圏内）。筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻単位取得退学、早稲田大学グローバルエデュケーションセンターを経て、現在、筑波大学人間系教育学域助教、博士（体育科学）。小学校～大学までバスケットボールに精を出すが、その後、体育学・教育学の研究へ。その際、2008 ～ 09 年にかけて附属高に通い詰めて調査。

『ホワイト部活動のすすめ－部活動改革で学校を変える』教育開発研究所、「子供と地域を育てる地域スポーツクラブ活動のあり方」（友添編『運動部活動から地域スポーツクラブ活動へ―新しいブカツのビジョンとミッション』大修館書店）、「『地域移行』による格差に備える自治体・学校の検討点」『教職研修 2022 年 8 月号』、「運動活動の地域移行をめぐる課題とスポーツ推進委員」『みんなのスポーツ 478 号』、「多様化する運動部活動と地域との関係性」『みんなのスポーツ 438 号』等で部活動改革について論稿執筆。スポーツ庁「地域クラブ活動への移行に向けた実証事業における調査・分析チーム」のコアメンバー。

－　コーディネーター　－

中塚 義実（NPO 法人サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭、スポーツ社会学・教育学）

大阪府茨木市立南中学校、大阪府立三島高校、筑波大学でそれぞれサッカー部・蹴球部で熱く活動。

大学院時代は茨城県立竹園高校サッカー部の外部コーチ、地域クラブの筑波学園バルバロスを主宰しながら、筑波大学蹴球部 OB で構成されるジョイフル本田サッカー部でプレーする。

1987 年より現職。保健体育科教諭・蹴球部顧問として、還暦を過ぎて再雇用者となったいまも定点観測続行中。卒業生は様々な分野で活躍。卒業生との交流を人生最大の喜びと位置付ける。

1995 年度より東京都サッカー協会フットサル委員（ユース部会長）。1996 年度に東京都内でユースサッカーリーグ（DUO リーグ）を創設。1997 年度よりサロン 2002 の活動開始。2014 年度に NPO 法人化。

著書に『少年のためのサッカー入門』（長岡書店）、『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』（かもがわ書店）、『運動部活動の理論と実践』（大修館書店）など。

日本部活動学会理事。日本ヤタガラス協会副会長ほか。

公開シンポジウム②
部活動で学んだことを語ろう!
ー筑波大学附属高校蹴球部の近現代を中心に

〈テーマ設定の意図〉

1. 部活動の意義を、卒業生の視点から考察したい

卒業生と話をすると必ず「高校のサッカー部で学んだことが、いつも自分の根っこにある／社会に出て役に立った」という話になる（ネガティブな印象を持つ者と会うことは少ないのだろうが…）。

部活動には、「結果」だけでなく「過程」そのもの（日々の活動、他の諸活動とのバランス、仲間や指導者との交流、一つひとつの小さなエピソード…）に大切な「学び」がある。そのときは気づかなくても、卒業後何年たっても残っている「本質」の形成に貢献していると思う。

教育の成果について、短期的な評価が求められる傾向にある。しかし「本質」についての成果をみるには時間がかかるし、卒業後何年もたってはじめて気づくこともある。

それらを卒業生から引き出し、部活動の意義を、長い目でみて考察し、共有したい。

2.1987 ～ 2024 の 38 年間の蹴球部の足跡を残しておきたい（大戦前については報告済）

中塚の“定点観測”は、学校の部活動、スポーツ指導の現場の記録として貴重である（と思う）。

・サッカー界が、地域に根差したプロ化（クラブ育成）を打ち出し、メジャースポーツに成長した時期である。それによって学校現場はどうなっていったのか。
・プロリーグ発足と高校サッカーの将来を見据え、先駆的に取り組んだことは、何をもたらし、いまどのようになっているのか（リーグ戦の導入／チームからクラブへ／卒業生との連携など）。
・青少年を取り巻く社会環境や自然環境の変化が、ヒトとしての成長に及ぼす影響を危惧する。部活動改革の議論にも通じるものである。一石を投じたい。

オープニング

中塚：皆さんこんにちは。NPO 法人サロン 2002 理事長の中塚義実です。「部活動で学んだことを語ろう」というシンポジウムを、「筑波大附属高校蹴球部の近現代を中心に」というサブテーマで取り上げます。筑波大学附属高校の教員をこの 3 月で 38 年間、勤めあげることになります。そのタイミングで、このシンポジウムを企画しました。いまから 2 時間半、密度の濃い時間を過ごしたいと思います。

本シンポジウムは、日本部活動学会の後援をいただいています。神谷拓会長がオンラインで参加されます。同じくご後援いただいた桐窓サッカー倶楽部ー筑波大学附属高校蹴球部の OB 組織からは、菅原会長はじめ、多くの卒業生が会場にお越しくださいました。オンラインにも数名いらっしゃいます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

登壇者のお二人をご紹介します。お手元の資料の 4 ページにプロフィールがあります。

まずは髙橋正紀さん。岐阜協立大学経営学部の先生で、学生時代は筑波大学蹴球で私の一つ下の後輩で、特に大学院のころはしょっちゅう一緒につるんでいた仲間です。

〈進　行〉

14：30～　14：40　　1．オープニング

14：40～　15：20　　2．第１部　部活動改革をめぐる現状と課題－部活動で何を学ぶか（概論）

プレゼン①髙橋正紀氏
プレゼン②朝倉雅史氏

15：20～　16：30　　3．第２部　筑附高蹴球部の近現代史

①中塚着任からDUOリーグ創設まで（1987～95）
②チームからクラブへ－手探りの挑戦（1996～2008）
③校内的な承認以降－安定と停滞（2009～24）

16：30～　17：00　　4．クロージング

高橋：岐阜協立大学の髙橋と申します。中塚さんとは学生時代、先輩なんですけど同級生のような、そういう深いお付き合いをさせていただきました。この学校にも何度も来させていただいて、今回もお声かけいただきました。今日は私の専門としているところに関して少し情報提供させていただきます。よろしくお願いします。

中塚：もうおひと方。いまの所属は筑波大学人間系スポーツ経営学の朝倉雅史さんです。朝倉さんもこの学校と深い関わりがありまして、ちょうど119回生が高校1年生のころ、半年にわたって私にずっとくっついて、教師は何をやっているのか、教師の「信念」についての研究をされました。

朝倉：筑波大学の朝倉です。先ほど中塚先生からご紹介いただいた通り、2008年、半年ぐらい筑波大学附属高校に通い詰めて、中塚先生を研究するというユニークな研究をさせていただきました。いま思うと、中塚先生のお部屋に伺ったときの本の多さと、積み重なった書類の山にびっくりした思い出があります。今日はその恩返しのつもりでお話をさせていただこうと思っております。どうぞよろしくお願いします。

中塚：本日の進行を確認しておきたいと思います。まず第1部として、部活動改革を巡る現状と課題、部活動で何を学ぶかの「概論」ということで、髙橋さん、朝倉さんの順でそれぞれ20分ぐらいずつ、部活動の置かれている現状だったり、可能性と課題だったりを挙げていただき、後半の議論に繋げるベースとなるような論点を示していただきたいと考えます。それに続いて第2部では、筑波大学附属高校蹴球部の近現代史を、私の方で用意したスライドを用いて振り返ります。1987年度、附属高校の卒業回数で言うと96回生が3年生のころから、つい先日行われた新人戦のあたりまで、私が顧問を務めた38年間の振り返りです。

第2部では卒業生の皆さんからコメントをいただきながら進めます。いや、卒業生だけじゃないですね。今日は高校1年生と2年生も来ていますので、彼らからのコメントもちょうだいします。

ではさっそく第1部です。髙橋さん、よろしいですか。

第1部　部活動改革をめぐる現状と課題　　プレゼン① 髙橋正紀

改めまして皆さんこんにちは。私の方からは「部活動を俯瞰する」というタイトルでお話しさせていただきます。専門はスポーツ哲学です。現場でも大学サッカー部の監督をずっとやってきましたし、体育教師が自分のアイデンティティです。ほとんどの人が、部活がどういう位置にあるのか理解されていないのが現状です。そのあたりを、私が専門とする「スポーツパーソンのこころ」と「グッドルーザー精神」を中心にご説明していきたいと思います。

■ グッドルーザー体験から「スポーツパーソンのこころ」まで

グッドルーザー体験についてお話したいと思います。私は１年間、ドイツのケルンスポーツ大学に留学していました。勉強をいっぱいしましたが、現地でアマチュアチームに入って１年間プレーをしてきました。そのときの衝撃的な体験です。

ディフェンダーとして相手のエースをマークして、１試合マークしきって１点も取らさずに私のチームが勝ちました。試合が終わって挨拶して帰ろうとしたら、私がマークしていた相手が私の方に寄ってきて、ちょっと恐怖を感じて何をされるのかと思っていたら握手を求められて、「今日の君の守備は素晴らしかった」とほめられたんです。

相手はサッカー大国で、日本はワールドカップにも出ていないころです。一流ってこういうことだなと思うと同時に、こういうスポーツのあり方こそ重要なんだろうなと思ったんです。グッドルーザーになれるということが。しかし日本ではグッドルーザーという言葉は知られていません。

これまで北海道から沖縄まで千回以上、全国で講義をしてきました。合計して７万数千人です。けど焼け石に水ですよね。日本にグッドルーザーの概念が存在していないから。だから阿部詩さんも試合が終わった後に負けて号泣してしまいました。

でも知ったら変わります。受講生の中で最年少は小学校２年生です。講義を聞いた翌日に、試合に負けた後に１人だけ相手ベンチに行って「ありがとう」って言って握手を求めたそうです。

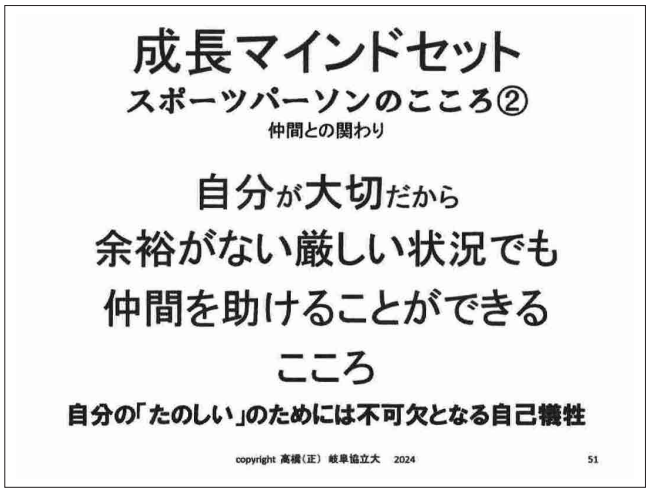
かっこいいですよね。いさぎよい。でも日本では知識すらないからできっこない。これを何とか伝えたいなと思って帰ってきたわけです。

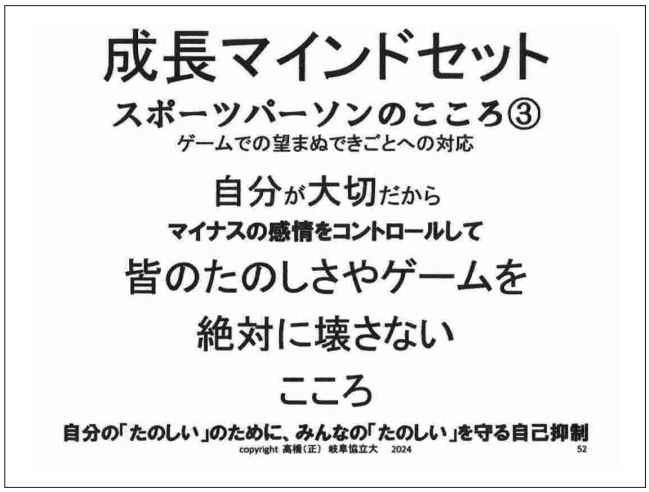
どういうふうに捉えたかというと、自らが望まない出来事に対する態度ですよね。予期しない出来事が起きたときにどういった態度を取れるのか。これはかつての武士道精神だということにを、ずっと探求を進めていく中でたどり着きました。これを復活させたい。こういうのをベースとするスポーツであれば、かなり役立つぞということですね。

そして「スポーツパーソンのこころ」という解にたどり着きました。

今日皆さんにお話するのは、部活の位置を客観化する、自分の位置を客観化するということです。それができないと話がごちゃごちゃになってしまいます。そこからグッドルーザー精神に繋がり、「自分を大切にすればいい」という、最も大切なことにつながるわけです。

成長マインドセットのスライドに示した三つが「スポーツパーソンのこころ」の中身ですが、今日はその中身に触れる時間はあまりありません。「日常と非日常」について整理しながら部活動を俯瞰して、大枠のところを確認しておきたいと思います。





■ たかがスポーツ－世界の常識

最初に世界の常識ということで、ユルゲン・クロップがインタビューで言っていたことをご紹介します。(英語のインタビュー)

“It’s only Football.”

たかがフットボール、たかがスポーツ、それ以外の何物でもないということを言っています。

私はＪリーグの仕事にも携わっていますが、日本のＪリーグの監督で「たかがスポーツ、たかがサッカーですから」と言える人がいるでしょうか。

私に言わせると「俯瞰できていない」ということです。

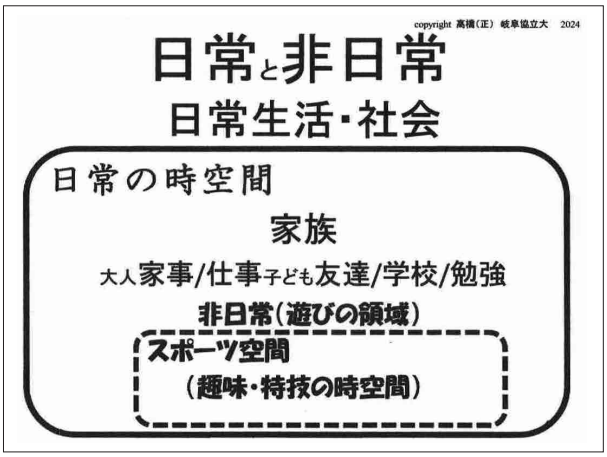
かつてそういう論調はあったのですが、「たかがスポーツ」に「されどスポーツ」までつけちゃって、やっぱり「されどスポーツでしょう」みたいな理解となっています。

この位置づけが明確でないと、いろいろややこしいことが起きてくるわけです。

プロスポーツ選手はすごく価値が高いことをやっているし重要だけれど、エッセンシャルワークではありません。コロナの頃を思い出してください。優先順位をつければ、エッセンシャルなものでないことは明らかなわけで、世界ではそれが常識になっています。

これを理解するために「日常と非日常」の俯瞰図を作ってみました。少し説明したいと思います。

■ 日常と非日常



外枠が世の中全体だというイメージです。そして日常の中でまず中核になるのが家族ということです。家族なくして人間なしと私は思っています。養護児童施設でも疑似家族を作って育てるわけですから、家族は中核ですよ。家族の価値を取り戻したいと思ってるぐらいです。単純に考えて、世の中の日常における中核は家族です。

その家族の中で、大人たちの日常は何かというと、家事とか仕事を日々繰り返しているということです。それが家族の中の日常です。子どもたちはまだ社会に出ていませんので、学校や友達、学校へ行って勉強するということを日々繰り返しているわけです。これが日常という位置づけになります。

この日常の中に非日常という時空間を作って、そこでスポーツをしているということです。ここの点線は、スポーツの場合ルールだと考えてもらうと理解がしやすいと思います。もちろんスポーツだけでない趣味や特技、いろいろなものが同じ非日常の空間に入っているということです。

ただ、「日常の中に非日常がある」というところが大きなポイントで、日常が壊れると非日常は味わえなくなります。たとえば個人的に大怪我をする、ものすごく貧乏な状態である。そういう状態だと非日常を味わえなくなります。あるいは社会が壊滅的な状況である。たとえば戦争が起きている。こういうことだと非日常を味わえないですよね。だから「日常あっての非日常だ」ということが、このような説明を受けないとなかなか理解できないんですね。

非日常だけになっちゃってる「スポーツだけ高校生」や、うちの大学もスポーツ推薦組が多いんですけど、そこが全てだと思っている。でも「日常あっての非日常だ」ということなんです。

もう少し説明を加えていくと、「日常ってマストだよね」ということです。しなければいけない。

一方、非日常はしなくてもいいことなんです。しなくてもいいことで、けど皆さんも部活やってたときに、私もそうでしたけど、夢中で大好きで生きがいにもなり得るような領域ですよね。でもすごく冷静にみると、しなくてもいいことです。だから実際にやってない人もいるわけです。

日常はどういうことが求められるかというと、当たり前のことを当たり前に繰り返すところであり、結果を出せないと単純に困るんです。仕事で結果を出さないといけませんし、クビになったりするというようなことです。私は中小企業経営などを中心にだいぶ長く経営学の勉強もしていますが、「日常は結果だよね」「仕事で結果出さないとね」という話になってきます。子どもたちも、テストで０点ばっかり取ってると「ちょっとやばいよね」ということです。

それに比べて非日常はどうかというと、「好きなことに取り組めるありがたいところ」です。日常あっての非日常ですから、日常がちゃんと機能して、なおか

つお金に余裕があって時間に余裕があって体力に余裕があると、スポーツだとか好きなことができるんです。ありがたいよねっていうことです。「ありがたい」と思ってスポーツができるか、「渋々やらされてる」というのでは全然違う状態です。趣味の領域でも特技の領域でも全く一緒です。結果を出せないと当然悔しいんですけど困らない。ものすごく悔しいけど、結果が出ないからといって困るような状況にはならない。

できることを増やした方がもっと楽しめるから、どんどん練習して少しでもうまくなろうとします。そしてその中でピカピカになって、ものすごい力を発揮していろんな人から認められ、プロから誘いが来ると、日常のプロスポーツ産業に行きます。非日常から日常に行っちゃうんです。こうなると、結果を出さないとクビになる世界ですね。囲碁・将棋の世界も一緒ですよね。歌の世界、芸能界も同じです。日常を出てしまっているから結果を出せなかったらクビになるんです。

私はＪリーガーにも講義をしますが、ここのところでハッとするわけです、彼らは。俺たち非日常でちやほやされて、すごいみんなに褒められてきたけれど、プロになったということは結果出さないとダメな世界に来ているんだなということを理解して、考え方が相当変わってきます。練習への取り組みも。何か二番目のものを探し出す選手がすごくたくさんいます。だから、一般論ですけど、できることを増やした方がいいよねってことですよね。できることを増やした方がいいんじゃないか、ということです。事実ですよ。説教でも何でもありません。いろんな高校でスポーツやってない生徒にも講義するんですけど、たいてい気がつきますよ。

こういうふうな理解ができてないと、やっぱり部活やってるときにありがたいとも思えない。結果出せないと悔しいんだけど、困ることじゃない。すがすがしく、変なストレスを抱えずに、悔しさはかみしめるけど、やれるようになるということですね。これを知ってるだけでだいぶ違うんじゃないかということですね。

■ 好きなことに夢中になるということ

しかしこういうことを知らなくても、「夢中になる」ということがどういう意味を持っているかということを、イチローの引退会見から聞いてもらいたいと思います。

記者：数多くの子どもたちが見ていると思います。これから野球を始めることになります。そんな子供たちにぜひメッセージをお願いします。

イチロー：メッセージかあ。苦手なんだよな。

野球だけじゃなくてもいいんですよ。自分が熱中できるもの、夢中になれるものを見つけられれば、それに向かってエネルギーを注いでいけるので、そういうものを見つけてほしいなと思います。

それが見つかれば、自分の前に立ちはだかる壁には向かっていける、向かうことができると思うんですね。それを見つけられないと、壁が出てくるとあきらめてしまうということがあると思うので。

自分に向くか向かないかというよりも、自分が好きなものを見つけてほしいなと思います。

最後の、「自分に向くか向かないかというよりも、自分の好きなものを見つけてほしい」というところがすごく大きなポイントです。下手くそでもいいんです。こだわってそれをやり続けるということですよ。おまけに非日常なんだから、むしろ自分なりに、レギュラーになれようがなれまいが、自分なりに全力を出してやりきった経験値の方が遥かに重要なんですね。

今日は詳しく話せませんけど、どんなチームにも、強いチームにも弱いチームも必ず、才能にあぐらかいているやつがいるんです。チームの中ではいけちゃうから。才能にあぐらをかいてる子たちは力がつかないですね。自分の大好きなことに対して全力でやり抜いたという経験値がつかないんです。今日は詳しく話せませんけどGRIT（グリット）、やり抜く力が身につかないんです。

社会に出たときに、それが生かせないということですよね。今イチローが言ってくれたように、夢中になれるものに対して全力で向かってって壁にぶつかって乗り越える。その経験が、夢中になれる、好きなものが見つかればできるということです。まさに部活っていうのはそういうような場で、私もそうでしたけど、１人でコツコツコツコツ練習をして、ちょっとでもうまくなってということを繰り返して、それでも試合に出れなかったりすることもあったけど、それをやり続けたこと自体に価値がある。こういうことが、位置づけも含めてわかっていないとなかなかちょっと…。

これは勉強とかでも全く一緒ですよ。頭のいい人が勉強に手を抜いてるみたいなことはどこにでもあります。自分の所属している集団の中でいけちゃうんだったら手を抜くっていうのは、生物学的にはあることかもしれません。自己保存のために。でも、非日常でスポーツをやるのであれば、全力でやり抜くことに大きな価値があって、そこに部活の価値があるんじゃないかと思います。

■ アンケート結果より

今日は日常と非日常のところだけが中心でしたが、最後にアンケートの結果をご紹介したいと思います。先日、兵庫県の神戸高校、長田高校、兵庫高校、灘高校の４校のサッカー部員に、日常と非日常の話をしました。「スポーツや趣味・特技は、日常の中の非日常で行われる遊びの一種である」ことについて、「全く初めて聞く」と答えた部員がほとんどでした。そうですよね。私も大学までそういうことを学べませんでしたので。ちゃんと知ってほしいよなっていうところです。

同じ質問を昨年、母校の筑波大学に行って、ハンド部、水球部、サッカー部数名に話をしたときにしてみました。説明された通りに理解していたという人は高校生より多く、聞いたことがある、ある程度理解していたという人もいました。とくにハンド部では、監督の藤本君が、僕とのつながりから日頃からそういう話をしているそうで、部員の９割は普段から聞いていたから知っているという結果になっています。

次の図がプロサッカー選手です。全く初めて聞く人がほとんどです。スポーツの中に入りこんでしまっているので、客観的に自分の位置を理解することができていません。ずっとスポーツの中にいてそのままプロになってしまったということです。むしろ普通の人たちの方が、日常と非日常を理解する確率が高くなります。

これとはまた違うグループですが、私の講義を聞いた半年後にどれぐらい覚えていたかということを尋ねてみました。忘れちゃうんですね。１回聞いたときには、日常の中の非日常だということに気がつくんですけど、半年後にもはっきりと覚えてる人はゼロで、ある程度覚えてるのが数人です。これはグランパスの選手６人に対するアンケートですけど、文章を読んだらある程度思い出したというぐらいです。

私としては、スポーツも含めた非日常の趣味・娯楽の価値を生かすためにも、より楽しんでよりやり切るためにも、やっぱり俯瞰ができていないとなかなか難しいなと。それでなくても俯瞰できてなくても部活が与えてくれるところはものすごく大きいというふうに私自身は考えてます。

ただ俯瞰できたら、もっと楽しめるし、もっと有意義にスポーツや趣味や特技をやる時間を活かせるっていう感じです。これはビジネスマンで言うところの“Work Hard, Play Super Hard”です。仕事をめっちゃ頑張って、遊びのところをもっと頑張るというような感覚が、俯瞰できてるとたぶんやりやすいんだと思います。そうじゃないと逆転しちゃうことがあるんです。遊びのところにかまけて仕事がおろそかになる。それはちょっと違います。仕事はガンガンやるけど、遊びはもっと没頭してやるみたいな感じです。俯瞰できてるからこそやれることなのかなということです。

私の方は一応こういう形で、部活を俯瞰するということでお話をさせていただきました。

中塚：ありがとうございました。部活動、そしてそこで取り組まれるスポーツ、ここではサッカーが大きな文脈の中でどういう位置づけなのというところを話してくださいました。

引き続いて、朝倉さんからお話いただきたいと思います。

第１部　部活動をめぐる現状と課題　　プレゼン② 朝倉雅史

筑波大学の朝倉です。後半のディスカッションに繋がるように、部活動を巡る現状と課題、部活動で何を学ぶのかについてお話をさせていただきたいと思います。

ここにお集まりの皆さんに限らず、いま部活動が学校からなくなりつつある、部活動が変化を迎えているということはご存じだろうと思います。いま部活動はどのような状況にあるのか、部活動の現状と課題をまずお話しします。そして、学校に存在し続けてきた部活動では何を学んできたのか。これは後半のディスカッションのテーマにもなると思いますので、それを理論的に整理してみたいと思います。

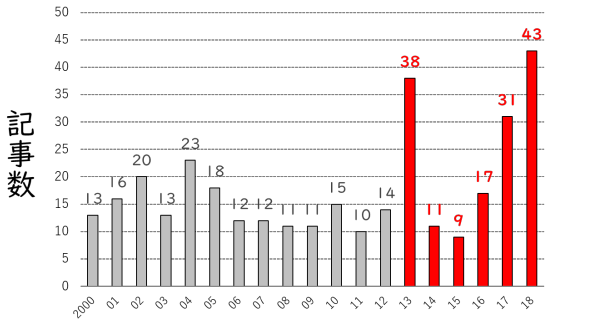
■ 日本の部活動の現状

まずは身近な話から、部活をめぐる日常の風景です。

例えば小学生が門出の言葉で「中学校に行ったら何々部に入りたいです」って舞台の上で卒業証書をもらって叫ぶこと。あと、私はいま大学に勤めてるんですけど、１年生の自己紹介では「高校では何々部に入ってました」。また大学生が就職面接で「学生時代に最も力を入れてたのは何々部での活動です」と言ったり、あるいは「〇〇銀行には体育会運動部枠がある」とか。また日常的に皆さんも「部活何やってた？」という会話をするわ

けです。部活というのは、社会を生きる上で名刺みたいに使われることがある。それぐらい私たち日本人の生活に深く、強く食い込んでいることがわかると思います。

そんな部活が大きな変化、改革の必要性で揺れています。それがどこから来たのかをお話したいと思います。



部活動をタイトルに含む新聞記事数の推移

出典：佐藤博志・朝倉雅史・内山絵美子・阿部雅子『ホワイト部活動のすすめ』，教育開発研究所，2019年

部活に関係する本を書いたときに、部活がタイトルに載った新聞記事の推移を調べてみました。2013 年頃に一つピークがあり、2014 ～ 17 年を経て 2018 年にもう 1 回ピークがきていることがわかります。新聞記事ですので社会の関心を凝縮したものと言えるのですが、2013 年と 18 年の 2 回ピークを迎えています。

部活動改革は、以前から何回も求められてきました。いまでこそ部活を地域に移行することが話題になっていますが、歴史的に言うと 3 回目です。今回の部活動地域移行は、強力なトップダウンで実現可能なかたちで進んでいますが、そういう話が持ち上がったのが 2013 年頃です。

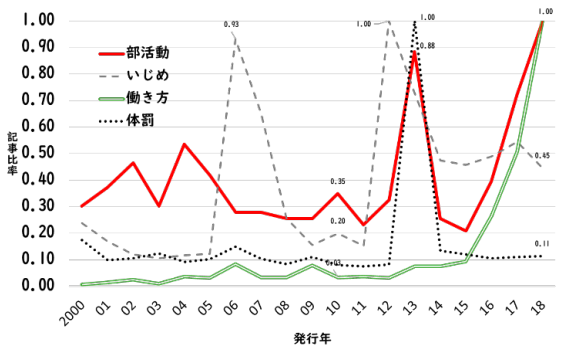
この年にまず何が取り上げられたかというと、皆さんにお配りしているこの事件です。大阪の桜宮高校バスケットボール部のキャプテンだった 2 年生の男子生徒が自宅で自殺していたことがわかった。これが起こったのが 2012 年の暮れで、報道されたのが年明けすぐです。2013 年は部活に関する衝撃的な事件から幕を開けたというのが事実で、これが引き金になって 2013 年に新聞記事のピークを迎えています。

ちなみに私は小中高とずっとバスケットボールをやっていて、高校のときはインターハイに出て当たり前、優勝するかしないかというところでやっていたので、こういう状況は私の脳裏に焼き付いています。いまでもちょっと疲れたりすると、高校の部活の夢が出てくるんです。すごい走らされたり叩かれたりしたことです。そういう意味では、私が部活動で何を学んだのか。先ほど高橋先生の講義を聞いていれば私の人生も変わっていただろうなと思うぐらい、非常に受動的で高圧的な活動の中に身を置いていました。桜宮高校男子バスケットボール部の事件も、さもありなんと思ったのを覚えています。

ただこれは 2013 年のピークです。2018 年にかけてのピークは何か、というと、TALIS（OECD 国際教員指導環境調査）という調査なんです。Teaching and Learning International Servey で「タリス」って言うんですけど、OECD 経済開発機構の調査です。2008 年、2013 年、2018 年と定期的に行っているんですが、ここで各国の教員の 1 週間の総勤務時間が調べられました。2013 年の調査結果が 2014 年頃に日本で報道されたのですが、調査に参加した国の平均労働時間が 1 週間に 38.3 時間。日本はどうかというと 53.6 時間もです。アベレージに比べると 1.4 倍、実数で 15 時間以上働いているということがわかったわけです。

このように国際比較してみると、日本の先生はなんて忙しいんだと。さらにその内訳を見てみると、課外活動指導時間（Extra Curriculum Activity）のアベレージが 2.1 時間のところ日本は 7.6 時間、3.6 倍。時数にすると 5 時間です。場合によってはもっとたくさんの時間をかけているかもしれません。1 週間に 15 時間以上、アベレージと比べて教員が働いているのが日本の事実であり、その 3 分の 1 にあたる時間を部活動に費やしている。また別の調査で、授業準備や指導に関する時間にどれぐらい時間をかけているのかを調べたら、なんとアベレージよりも少なかったという事実がわかったんです。つまり、いかに日本の先生が忙しいか、その忙しさを部活が生じさせているのかが話題になったがゆえにこんなことが起こったんです。

部活動改革と働き方改革の接点→「部活動改革」へ



キーワード別にみた新聞記事数の推移（ピークを1.0とした時の割合）

同じく新聞の記事数です。別の調査ですが、ここでもピークが二つできています。先ほどと同じく、2013 年と 2018 年にピークがきていますが、2013 年には記事数になかったあるお題に関する記事が右肩上がりに増えていき、2018 年にピークを形成しています。「働き方」というタイトルを含んだ新聞記事の数です。「働き方」と「部活動」が結びついて 2018 年にピークを形成しまし

た。ちなみにこれは、教員の働き方だけでなく 2015 年あたりから増えています。電通の女性社員が自殺したという事件を覚えておられると思います。それが 2015 年に起こったんです。それが 2016 年に労災認定されたあたりから、当時の安倍政権が国ぐるみで「働き方改革」を打ち出していきます。その中に教員の働き方改革、そして部活動をどうにかするというのが結びついていまに至るというのが部活動改革の原点になっているわけです。

2020 年に文部科学省がこんな通知を出しています。学校の働き方改革を踏まえた部活動改革概要というものです。ここに休日の部活動の段階的地域移行、ゆくゆくは平日も地域に移行すると書かれています。これがあったがゆえに、冒頭でお話した、部活動が学校からなくなるという認識を世間が形成した。これが部活動の現状と課題だと言えます。

■ 海外からのまなざし

ちょっと視点を変えてみようと思います。先ほど言ったように、日本人の生活に部活は深く、強く食い込んでいますが、その実際をお見せしようと思います。

私がバスケットボールをやっていたことは先ほど申し上げたとおりです。バスケットボールシューズは一大市場を作っていて、マニアがいるぐらいです。これは確か 2000 年の前半ぐらいに出たバスケットボールシューズで、ナイキが出した「Team BUKATSU」っていうシューズです。

世界を股にかける一大アパレルスポーツブランドが、日本で靴を売るために「部活」って名前をつけたのはすごいですよね。しかも売れたんです。日本人って部活が好きなんだな、部活って日本人の意識を刺激する３文字なんだなというのがよくわかると思います。

次に、海外の人から日本人の部活ってどのように見られているかです。実は欧米にはジャパノロジーという専門分野があります。日本研究ですが、そこで日本を研究している人がある論文を書きました。ピーター・ケーブルというマンチェスター大学の研究者が書かれたものです。

「１世紀以上にわたって、課外の部活動は社会人を育てる重要な働きを担うものとされ、その活動を通じて日本の若者は、社会でもっとも重要な価値観と信念、行動パターンを経験的に学んできた」

実はこれ、海外からみた日本人にとっての部活動の見解なわけです。

この人だけかと思いきや、別の論文でもやっぱり同じことを言っています。割と最近、2015 年の論文です。

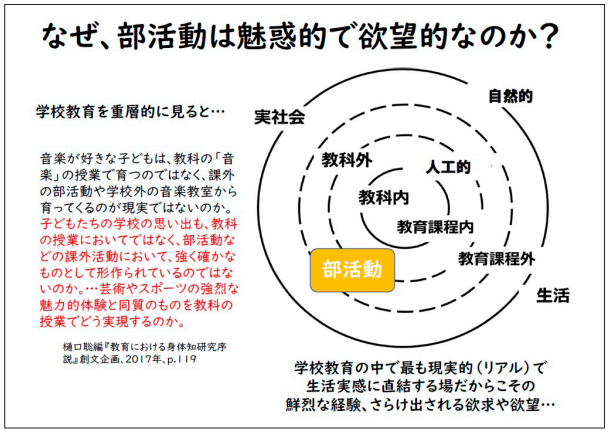
「課外クラブに参加している日本の学生は、参加していない学生よりも間違いなく、より肯定的な自己概念、忍耐力がある。親切、責任感がある、正直、明るい、考える、体力がある、感謝の気持ちがある、勤勉、自己主張ができる、礼儀正しい、協調性がある、上下関係を重んじる、友達を大切にするなどという傾向が強い。しかもスポーツ系のクラブに所属する学生は、非スポーツ系、いわゆる文化系のクラブに所属する学生よりもさらに高いスコアを報告している」

これはアンケート調査を定量的に分析して、部活、特にスポーツ系の部活に入っている人がどれぐらい高いスコアを示したのかを、「間違いなく undeniably」と言っているぐらいですので、「これは間違いないんだ」と外国人が、日本人の部活を捉えているわけです。

私たちからみて日本人は部活を大事にしているし、海外の人からみても、部活が日本人の生活にどれだけ食い込んでるかというのがこういったところがわかるんじゃないかなと思います。

■ なぜ部活動は魅力的で欲望的なのか？

なぜ日本人が部活をこれほど大事にしてきたのかを、補助線を引きながら考えてみたいと思って作ったのがこの図です。



学校教育の中にはいろんな教科があります。中塚先生が担当している保健体育だったり、受験で必須の数学とか英語とか社会科とかがあります。研究者の間で一つのキーワードがあって、教科には周辺性とか非中核性がある。これは私がそう思ってるんじゃなくて、海外の人たちが言っていることで、日本でもそう言っているんです。学校教育の中心になっている教科というのは、国語や数学なんです。なぜ中心に位置づくかというと、受験と結びつくからなんです。

カリキュラムの社会学の研究をしている人は、数学の先生や国語の先生は、学校の中で支配的な地位を得るということを言っています。なぜかというと、数学は答えがはっきりしているし受験科目だから生徒は一所懸命勉強する。片や保健体育はというとたかが遊びです。高橋先生の言葉を借りると休み時間の延長線上と考えられるわけです。なので保健体育は周辺的な教科と言われるんです。

では部活動はというと、教育課程外の活動です。最近一般によく知られるようになったことですが、実は学校で必須の活動ではないわけです。なので、部活は保健体育よりも学校の周辺に位置づく活動だということです。

ではなぜ部活は人を魅惑したり引きつけるのかというと、こういうことではないかと思います。学校の中心に位置づくということは、作られた、制度化された教室内の空間で行われることです。それが周辺に行けば行くほど、学校の周辺のリアルな世界に近づいていくわけです。だから学校の中心に位置づく教科は作られた空間の中でのできごとです。保健体育や部活がなぜ子どもたちに魅力的なのか。小中高の生徒にどの教科が好きですかって聞くと、必ず保健体育が一位になります。その理由は、「たかが遊び」と高橋先生は言っておられました。その通りだと思いますけど、部活動の位置づけを考えてみると、学校の中心から周辺に追いやられているということをポジティブに捉えると、リアルな生活に一番近い活動なんじゃないかということです。

なのでここに書かせて書かせていただいた通り、学校教育の中で最も現実的で生活実感に直結する場だからこそ、鮮烈な経験とか欲求とか欲望がさらけ出されるわけですね。

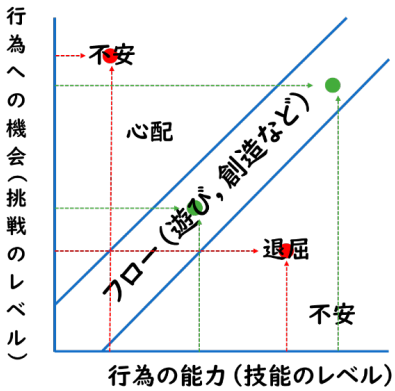
こんなことを言ってる人がいます。スポーツ哲学の先生ですが、**「子どもたちの学校の思い出も、教科の授業においてではなく、部活動など課外活動において強く確かなものとして形づくられているのではないのか。…芸術やスポーツの強烈な魅力的体験と同質のものを、教科の授業でどう実現するのか」**とまで言わしめるぐらい、部活は子どもたちにとって鮮烈な経験となるわけです。教員にとっても欲求とか欲望がさらけ出されます。体罰が起こるのは、非常にリアルな感情がむき出しにされる空間であるがゆえに、だということができます。それをどうコントロールするのかというのが、次のお話です。

ちなみに、部活ってなんでこんなに有効なのかということを、スポーツを例に、ちょっと見ていただきたいと思います。バスケットボールの試合場面で２分ぐらいの動画です。延長戦で、同点になり、フリースローで先制。これで同点になるんですね。

〈 ２分間の映像視聴 〉

これをみて育ってしまう。小学生でも絶対これ面白いと思うんですよね。

スポーツってなんでこんなに人々を惹きつけるのかというと、この場面を経験してしまうと、もうやめられなくなっちゃうんですよ。これってやっぱり部活動とかスポーツって、どれだけ人々を魅惑するのかがよくわかる場面ですけど、これも実は理論化されています。縦軸が機会で自分が挑戦しようとするレベルです。横軸が行為能力です。皆さん「フロー」という言葉ご存知でしょうか。これがちょうどよく均衡がとれていると夢中になってしまうんです。このように、自分の教育レベルが高くて、行為の調整レベルも高いと、このフロー体験が起こる。だからもう無我夢中になってしまう。



フロー状態のモデル（チクセントミハイ，2001，p.86）

でも逆に、自分の能力が高いのに行為の調整レベルが低いと退屈になってしまうし、自分の能力が低いのに機会、つまり挑戦レベルが高すぎると不安になってしまう。たぶんスポーツって、自分の能力と挑戦しようとするレベルが均衡していて、没入状態を繰り返していくことによって人々を呼び込ませていくところがあるんじゃないか。たぶん部活の中でこういう経験を皆さんされているんじゃないかなと思うんですね。フロー理論で説明した「楽しさ」です。

■ 部活動で何を学ぶのか？

最後に、部活動で何を学ぶのかという話です。

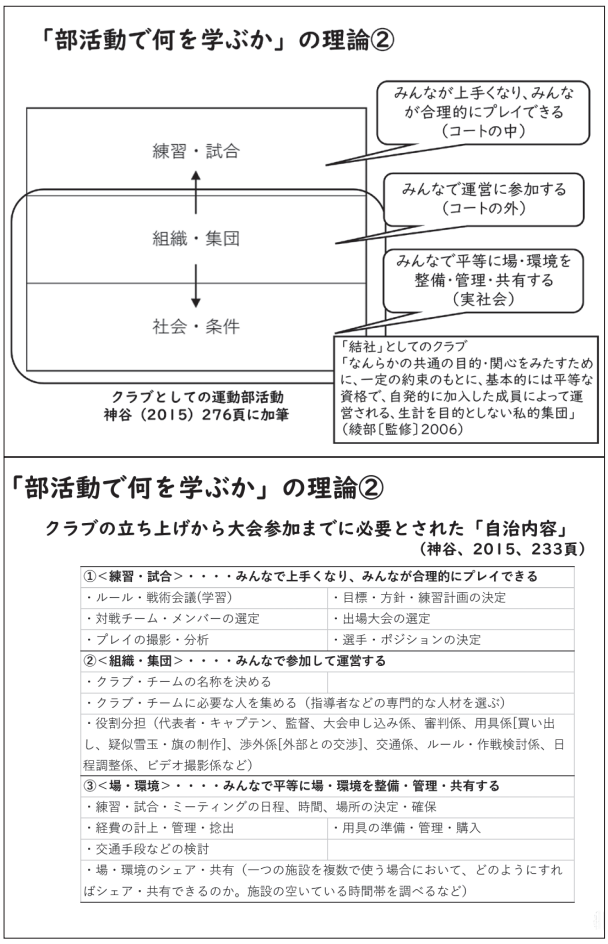
面白いことしたい。例えばサッカーをしたいという人たちがいるとします。部活で何を学ぶかっていうと、

サッカーしたいというだけではサッカーが楽しいという状態には至らないんです。

ただこの間にある、自分がサッカーを楽しみたいと思ったときに、サッカーって楽しいという状態に行き着くプロセスで一体何をするのかということが、部活動で学ぶことなんじゃないかと考えます。

これは部活動学会の神谷先生が示されているものですが、部活でやってることって練習とか試合だけじゃなくて、組織や集団をどうやって作るのかがあります。その組織や集団が、自分たちでスポーツの場所を作るために社会や条件にどうやって働きかけるか。こういうことをまるっと行っているのが部活なんだよというのを説明されています。まさにその通りだなと思います。ここにリストに掲げていることが、皆さんが部活の中で必ずやっていることです。

しかし、私のような部活動経験をしてきた者は、練習や試合しかやってないんです。これがたぶん、私が部活動で学んでないんだなって思う理由になるんですけれど、附属高校蹴球部で活動された皆さんがどのように組織や集団、環境についての自治をしてきたのかというのも、学びの中身として考えていていただくことかなと思って用意しました。



■ 部活動で何を学んだことはどのように広がっていくのか

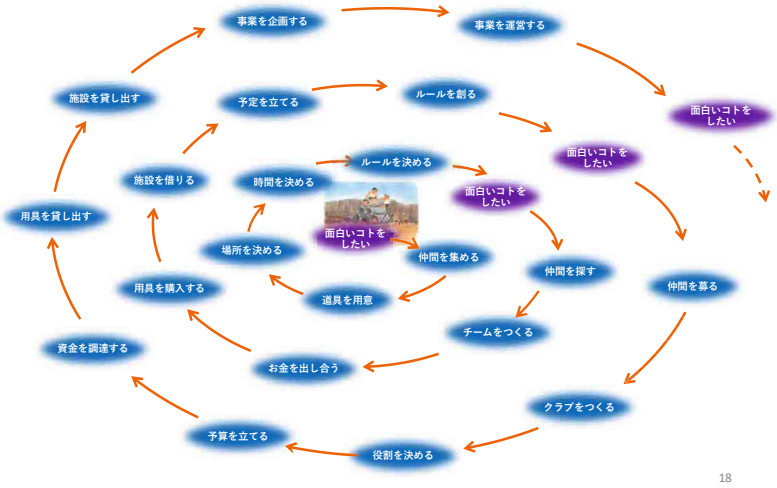
最後に、なぜ部活で学んだことが社会で役立つのかということを説明しておきたいと思います。

部活って、先ほど言った通り面白いことを創造する活動なんですね。この面白さというものは、ちょうどフロー状態で均衡が作られている状態です。そこで経験するのが、「生きられる時間」という言葉を使うんですけど、つまらない話を聞いているときって時間がすごく長く感じられるじゃないですか。面白い話ってあっという間に終わりますよね。だから実は、私たちって時計で測れる時間以外の、自分で面白いときに無我夢中になってしまうような時間とか、つまらないときになかなか終わらない時間というような、生身の時間というものを持っているのだということです。「生きられる時間」というんですけど、まさにフロー体験時間ですよね。

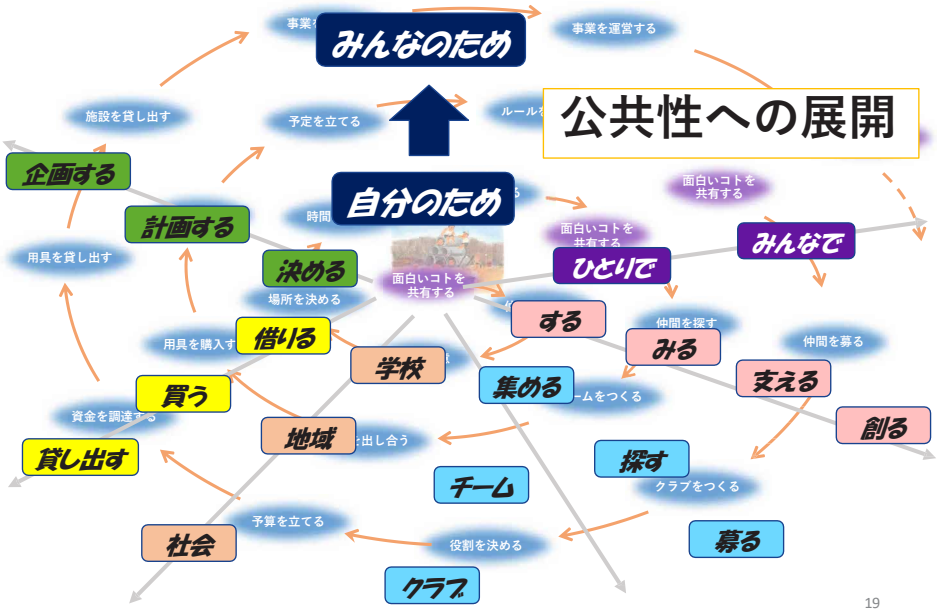
こういうのを作ろうとしたときに私たちがやってることを整理してみます。まず面白いことをしたいと思ったら、仲間を集めなきゃいけないし、道具を用意しなきゃいけない、場所を確保しなきゃいけない、時間を決めなきゃいけない、ルール作らなきゃいけない。

面白いことができ、もっと面白いことがしたいとなっていくと、皆さんにお配りした資料にあるとおり、どんどんどんどんスパイラルになっていくわけです。

面白いことをするスパイラル



面白いことを追求すると何が生まれるか？



仲間を集めるだけじゃなくて、仲間を探す、チームを作る、お金を出し合うとかです。このようにスパイラルしていくと、やろうとすることが大きくなっていくわけですね。5 人で遊んでいたのが 10 人になり、10 人で遊んでいたけど他のチームとやってみたいとなる。用意された道具を使っていたけど、自分たちで購入したいとか、もっと広い場所でやりたいというようにやっていくと、面白いことがどんどん広がっていく。私たちはこれを繰り返していると、ただ単に自分がするだけじゃなくて、見たりささえたり作ったりするし、友達や仲間を探したり募ったりするし、チームがクラブになっていくし、学校から地域とか社会に広がっていくし、道具を借りるだけでなく買ったり貸し出したりする。このようにやっていくと、はじめは自分のためだけだった活動が、あるいは面白いことをするために行っていただけの活動が、みんなのためになっていく。自分の私利私欲や自分だけの面白さだったものがみんなの面白さになり、「公共性への展開」が生まれてくるんです。

部活動って、まさにこういうことを学ぶ場じゃないかなと思うわけです。だから部活で学んだリーダーシップがどこかの会社で生かされたり、他の人と働くときに誰かのためになったりする。こういうことが、部活動で面白いことをしたいということの延長線上にあるんじゃないかと考えています。

最後に、面白いことは遊びとか余暇という言葉で表されるんですけれど、何でそんなに面白いことって人間にとって大事なのかというのをいくつかの言葉でご紹介して終わりたいと思います。

先ほど「遊び」という言葉が出てきましたけれども、こんなことを言った人がいるんです。

「文化は遊びの形式の中に成立した。
文化は原初から遊ばれるものであった」

ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』/1938年

文化の中に遊びがあると皆さん思いがちかもしれません。けど文化は、実は遊びがあるから生まれてくるんです。衣服は、「寒いから着る」ということだけであったら、皆さんが着ている服ってそんなにデザインは必要じゃないじゃないですか。でも何かかっこいいとか、かわいいとか、おしゃれというのも、服を遊びだから、エッセンシャルじゃないものを身にまとうことによって、服の文化が生まれていったりしますよね。このように、遊びとか余暇というものがあるが故に、人間は文化を作ることができていると。そのように考えたのが、ホイジンガが『ホモ・ルーデンス』という著書で言われたことです。

日本に目を向けてみても、平安時代に編まれた歌集の中にこんなことが書かれています。

「遊びをせんとや生れけむ　戯れせんとや生れけん
遊ぶ子供の声聞けば　我が身さえこそ動がるれ」

『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』※

※ 平安時代に編まれた歌集、主に当時の流行歌（今様）が集められたもの

後白河法皇によって編まれた「梁塵秘抄」で詠まれたものです。遊ぶために生まれてきたんじゃないのかって、もう悟っちゃってるような歌です。

遊びって人間にとってすごく大事だなということです。

学校の語源ってギリシャ語のスコールという言葉ですけど、拍子抜けするかもしれませんが、これは実は「暇」という意味です。実は学校は「暇」な場所だったんです。

この暇な場所で学んだりするということに人生の楽しみがあったわけですね。学校っていやいや行く場所のように近年なってしまって現在に至りますが、そもそも学校という場所は隙を作っていく場所だし、そこで学ぶことがすごく楽しかったから、西洋の人々は人間形成や成長のために余暇を大切にしたし、それを充実させるためにわざわざ労働時間を短縮したんです。

だからギリシャ人が怠惰になっちゃったっていうのがあるんですけれども、自己実現のための余暇とか遊びは、個人が個人であるために譲り渡すことのできない最後の砦と言われるぐらいです。

話をまとめると余暇とかフローとか面白いことっていうのを中心にして、それを作っていくっていうのが部活動だし、その作っていくっていう部活動の活動が自分のためのに行っていたのがどんどん広がっていくことによって、誰かのためになってる公共的な性質を帯びていく。

そういう可能性が部活動にはあるんじゃないかなというふうに思うところです。

附属の OB が集まって、サッカー部の活動について振り返られると思いますので、ぜひ自分の、自分たちの活動っていうのに意味を持たせるとしたらどんな意味があったのかなというの材料になればいいかなと考えております。

申し訳ありませんちょっと時間が超過してしまいました。

中塚：朝倉さんありがとうございます。ここにお集まりの蹴球部卒業生の皆さんは、こういうことをあまり考えないまま過ごして来たと思うし、ここでこのような話に触れることを想像していなかったかもしれません。話の前段として、部活動の位置づけであったり、あるいは遊び、非日常、それがどのような中身を持っているのか、どのように位置づけられ、社会とどう繋がっているのかを学術的に捉えたうえで中身に入りたいと考えました。

ここからは、皆さんが体験してきた蹴球部の近現代史を振り返りながら、一体どんなことを学んだのか。「学んだ」という言い方は大げさかもしれませんが、それがいまの皆さんにどのように繋がっているのかについて意見交換できればと思います。

第 1 部のスライドは登壇者が提供。写真は中塚が所蔵・提供

第 2 部　筑附高蹴球部の近現代史

0. 近現代史の前に－サッカーとわたし（中塚義実）

今年の 2 月、同じ桐陰会館で、附属中高蹴球部の 100 周年のお祝いをすることができました。我々の部は 100 年前から、あるいはその前から遊びでボールを蹴っていた人たちがいて、ちょうど 100 年前、学校公認の部活動として位置づけられました。うち最近の 38 年間を「近現代史」と勝手に言っているのは、私が関わった期間のことです。

サッカーとわたし
（中塚義実）

1961年生まれ、1970年より大阪

父・頼彦もサッカーで…
土佐中高：成田十次郎
大阪商業大学：上田亮三郎

1974年～　大阪府茨木市立南中学校
「茨木南中サッカー部」
1977年～　大阪府立三島高等学校
「三島高校サッカー部」
1980年～　筑波大学体育専門学群
「筑波大学　AB⇔CD」
1984年～　筑波大学大学院修士課程
（スポーツ社会学）
「ジョイフル本田」
1987年～　筑波大学附属高等学校
「東京教員クラブ」

1974年　西ドイツ大会
1978年　アルゼンチン大会
1979年　ワールドユース
1980年　ヤヒロに驚く
運動部のあり方に悩む
日本代表は低迷
日本リーグ1984「格闘技宣言」
1985年　W杯出場を逃す
1986年　日体協スポーツ憲章
サッカーのプロ化を修士論文で
1991年2月　記者発表
日本プロサッカーリーグ誕生（11月）

本題に入る前に、着任以前の私とサッカーの関わりについて、サッカー界の動きと絡めて押さえておきたいと思います。それは、この部がどのように変わってきたのかにも関係すると思います。

父親・頼彦もサッカーをやっていました。高知市内の中学時代で、高校生だった成田十次郎先生との出会いがきっかけです。皆さんのお手元にある冊子『游 ASOBI』2023 年度版には、昨年度の公開シンポジウム「成田十次郎先生を語ろう！」の報告書が載っています。デットマール・クラマーを日本に紹介された方です。あとで見ておいてください。

組織的にサッカーに関わるようになったのは茨木南中サッカー部に入ってからです。今年 50 年ぶりに同窓会があり、熱血サッカー部の仲間も大勢集まりました。

世界のサッカーでいうと、1974 年の西ドイツ大会が中学 1 年のときです。「ダイヤモンドサッカー」で初めて海外サッカーを見て、緑の芝生でプレーしていることに驚きました。

中学時代は熱血サッカー部でしたが、高校は真逆の民主的運動部でした。練習は主将を中心に部員が進め、試合に出るメンバーも先生ではなく部員が決めます。三島高校サッカー部顧問は成田十次郎先生の教えに感銘を受けたとお聞きしたことがあります。成田先生は東京教育大学サッカー部監督として部員主導の民主的な部活動運営をされ、結果も残し、新聞や雑誌で取り上げられました。この記事を読まれたそうです。高校時代はそういう中で、熱くサッカーをやっていました。主将として練習を考えリードしていた経験が、いまの仕事につながっているのかもしれません。

1979 年のワールドユースはマラドーナが大活躍してアルゼンチンが優勝した大会です。高校 3 年のときです。筑波大学体育専門学群に入学し蹴球部に入ると、ワールドユースの日本代表で同年代の 3 人のうち 2 人が推薦入学で来ていました。一人は風間八宏です。「ヤヒロに驚く」。彼のスキルにはホンマに驚かされました。

プロサッカーがなかった当時、筑波大蹴球部は各都道府県の一国一城の主が集まるようなところでした。部員は 100 人。けど公式戦に先発で出られるのは 11 人です。私は上のチームと下のチームを行ったり来たりするような選手でした。

100 人をどうやってマネジメントしていくかは大きな課題でした。「運動部のあり方に悩む」と書きましたが、ちょうど 4 年生になるときに大議論しました。当時、部のルールとして「禁煙」というのがありました。アスリートとして禁煙は当然だということで、監督が示したルールです。当時はいまよりタバコを吸う人が多く、ルールとして掲げてはいたけどこっそり吸っている人は結構いたんです。僕らの代になるときに、このルールをどうするかという議論を、まず同級生ではじめました。決まりだからダメという者、運動生理学的に問題があるからダメという者、タバコを吸うことで落ち着く人にとってはいいじゃないかという者。いろいろいます。私は「守れもせんルールを掲げてもしゃあない。それよりも“よい選手、よいチーム、よい指導者”という部のモットーに立ち返って“よい”とはどういうことかを議論すべき」という立場でした。

同級生でさんざん話をし、下級生を巻き込んで全体ミーティングを何度も繰り返し、最終的には「一度全員退部する。11 月某日のミーティングに、禁煙というルールを守れるやつが再び集まる」ことになりました。サッカーの練習や試合とは関係ありませんが、自分たちの部をどうしていくかということを自分たちで本気で議論した場だったと思います。大学時代の忘れられない経験です。

大学院でスポーツ社会学を専攻し、スポーツの多様なあり方、チームとクラブ、諸外国のスポーツ環境について学びます。修士論文は「日本サッカーのプロ化過程に働く社会的背景の研究」で、奥寺康彦さんと木村和司さんがプロ選手として公認されたあたりを取り上げたものです。日本サッカーは世界の舞台からはるか遠く、アマチュアスポーツからプロスポーツにようやく一歩踏み出したころです。Ｊリーグ誕生はまだ先で、学校以外のクラブスポーツが日の目をみるのはまだまだ先の話です。

修士論文を書いた翌年、1987 年に着任します。私が赴任したのはそのような頃でした。これが「近現代史」前段です。

1. 着任から DUO リーグ創設まで（1987 ～ 95）

ここからは写真をみながら「近現代史」を追っていきたいと思います。

着任初年度の夏合宿の写真です。練習は月水木土、日曜は練習試合。都心部では珍しくフルサイズのピッチが取れるので、毎週いろんな相手と練習試合をしていました。中体連や高体連の会場になることも多く、関東リーグに上がった東京教員の試合会場にもなりました。私自身、現役としてプレーしていたころです。毎週木曜日は部活後に学習院まで自転車で移動し、ナイターで学習院大と東京教員の練習試合に出て、そのままトンカツ屋で飲み食いして帰るという生活です。この頃の部活は、私にとっては自分自身のトレーニングでもありました。

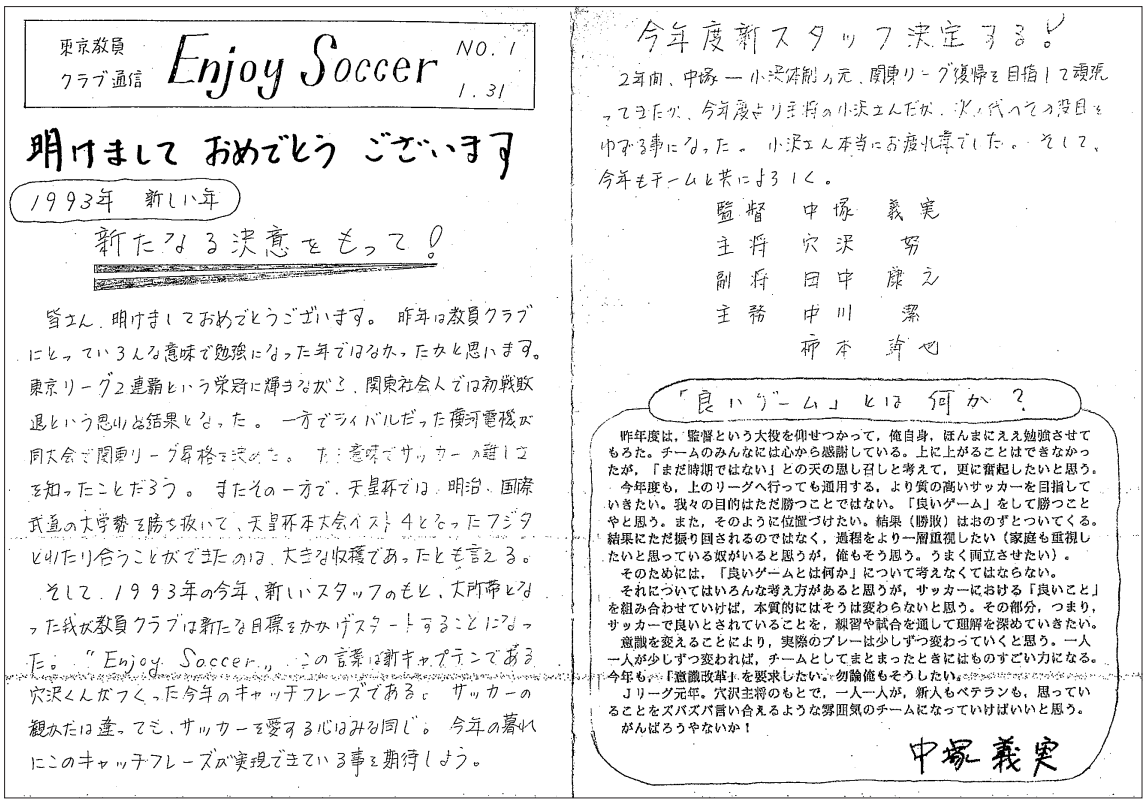
化学の伊藤良徳先生が裏方のところをていねいにやってくださいました。化学講義室はサッカー部のクラブハウス。女子マネージャーあってのサッカー部です。サッカー界では、先ほど言ったようにプロ選手は公認されたけど、着任した年の 10 月のソウルオリンピック予選で中国にホームで負けて出場権を失います。

そんなころですが、サッカー部は徐々に力をつけてきたんです。AC ミランが前線からのプレッシングをやり出す前に、うちは「アタッキングディフェンス」という言い方でチャレンジし、力をつけてきました。神奈川の湘南高校が全国出場したときも、定期戦ではほぼ互角のゲームができました。負けましたけど…。

この頃、「3 年の夏」にある高校選手権予選にチャレンジする人のことを 3 年の夏まで「残る」という言い方をしていました。6 月第 1 土日にある学習院との総合定期戦は、全校生徒・卒業生・保護者が見守る中で部ごとに試合をするビッグイベントです。ほとんどすべての部が、院戦を最後に「引退」という言い方でやめるんです。甲子園の予選がある野球部と、夏がシーズンの水泳部は 3 年の夏までやっていましたが、サッカー部はそれぞれの判断に任せていました。

冬の高校選手権予選は、出場チームの多い東京では夏からはじまります。そこまで続けるか、それとも他の部と同じように院戦でやめるかは、昔も今も大きな選択です。DUO リーグができて以降は「3 年の夏までやるのは当たり前」としていますが、このころは各学年 2 人いるかどうかといった状況でした。コロナ後のいまも同じ状況に戻ってしまい、いまでは学習院にほとんど勝てなくなりましたが、このころは「学習院には勝てる」ぐらいの印象でした。

先ほど言った通り、私自身も現役でプレーしていました。“働き方改革”という言葉もありません。学校のことはすべてやる、高体連の大会も、東京教員の活動も充実。昔の資料をみていたら、こんなのが出てきました。東京教員で監督兼選手をやっていたころの「東京教員クラブ通信」です。1993 年 1 月の、監督兼選手となって 2 年目のものです。1993 年のスタッ



東京教員クラブ通信 Enjoy Soccer NO.1 1.31

明けまして おめでとう ございます

1993年 新しい年

新たなる決意をもって！

皆さん、明けましておめでとうございます。昨年は教員クラブにとっていろんな意味で勉強になった年ではなかったかと思います。東京リーグ2連覇という栄冠に輝きながら、関東社会人では初戦敗退という思わぬ結果となった。一方でライバルだった横河電機が同大会で関東リーグ昇格を決めた。また意味でサッカーの難しさを知ったことだろう。またその一方で、天皇杯では、明治、国際武道の大学勢を勝ち抜いて、天皇杯本大会ベスト4となったフジタとめぐり合うことができたのは、大きな収穫であったとも言える。

そして、1993年の今年、新しいスタッフのもと、大所帯となった我が教員クラブは新たな目標をかかげスタートすることになった。"Enjoy Soccer"。この言葉は新キャプテンである穴沢くんがつくった今年のキャッチフレーズである。サッカーの観方は違っても、サッカーを愛する心はみな同じ。今年の暮れにこのキャッチフレーズが実現できている事を期待しよう。

今年度新スタッフ決定する！

2年間、中塚一小沢体制の元、関東リーグ復帰を目指して頑張ってきたが、今年度より主将の小沢さんだが、次代へとの役目を中塚の事になった。小沢さん本当にお疲れ様でした。そして、今年もチームと共によろしく。

監督 中塚 義実
主将 穴沢 努
副将 田中 康之
主務 中川 潔
柿本 靖也

「良いゲーム」とは何か？

昨年度は，監督という大役を仰せつかって，俺自身，ほんまにええ勉強させてもろた。チームのみんなには心から感謝している。上に上がることはできなかったが，「まだ時期ではない」との天の思し召しと考えて，更に奮起したいと思う。

今年度も，上のリーグへ行っても通用する，より質の高いサッカーを目指していきたい。我々の目的はただ勝つことではない。「良いゲーム」をして勝つことやと思う。また，そのように位置づけたい。結果（勝敗）はおのずとついてくる。結果にただ振り回されるのではなく，過程をより一層重視したい（家庭も重視したいと思っている奴がいると思うが，俺もそう思う。うまく両立させたい）。

そのためには，「良いゲームとは何か」について考えなくてはならない。

それについてはいろんな考え方があると思うが，サッカーにおける「良いこと」を組み合わせていけば，本質的にはそうは変わらないと思う。その部分，つまり，サッカーで良いとされていることを，練習や試合を通して理解を深めていきたい。

意識を変えることにより，実際のプレーは少しずつ変わっていくと思う。一人一人が少しずつ変われば，チームとしてまとまったときにはものすごい力になる。今年も，「意識改革」を要求したい。勿論俺もそうしたい。

Jリーグ元年。穴沢主将のもとで，一人一人が，新人もベテランも，思っていることをズバズバ言い合えるような雰囲気のチームになっていけばいいと思う。がんばろうやないか！

中塚 義実

フは監督・中塚、主将・穴沢です。穴沢さんはJリーグ審判もされ、いまは都立高校の校長先生です。

通信には、監督メッセージとして「良いゲームとは何か？」を書いています。「我々の目的はただ勝つことではない。良いゲームをして勝つことやと思う」と。このフレーズは成田十次郎先生の本からいただいたものです。そのために「良いゲームとは何か」について考えることや、「サッカーにおける良いことを組み合わせ」ること、普段の「練習や試合を通して理解を深めていきたい。意識を変えることにより、実際のプレーは少しずつ変わっていくと思う。一人ひとりが少しずつ変われば、チームとしてまとまったときにはものすごい力になる」と述べ、教員チームの練習も、高校生がするような基礎練習からしっかりやった記憶があります。これがJリーグが始まる1993年の年頭あいさつでした。

3月の卒業式の写真には、初担任の101回生サッカー部員にまぎれて、中塚にだっこされる赤ん坊がいます。のちに119回生となる長男です。1993年5月にJリーグが開幕しました。プロサッカーがはじまったというだけでなく、学校・企業に依存していた日本のスポーツ界に、地域に根差したクラブ育成という考えを持ち込んだJリーグは画期的でした。「Jリーグ100年構想」ですね。

102回生の卒業アルバムに3名の女子部員が写っています。卒業とともに女子部員不在となりますが、111回生で再興します。

1993年と1994年の夏合宿の写真です。場所は「高萩大心苑」です。

5泊6日の夏合宿はハードなものでした。合宿最終日は1年生vs2年生の試合とマラソン大会で締めくくりますが、104回生のある部員が「坊主をかけよう」と言ってはじまったのが「坊主戦」です。すでに坊主アタマだった、○で囲ったこの部員が言い出しっぺです。坊主戦は学年対抗として始まりましたが、のちに全員がくじを引き、負けた二人がチーム編成して坊主をかけて戦うスタイルになります。こんなアホナことを本気で遊べる集団でした。いまではハラスメントになりそうですね。

1993年、Jリーグが始まったときの3年生は103回生です。○で囲った2人の3年生が、真っ黒い顔で夏

合宿に参加しています。今日はその 2 人だけでなく 103 回生が大勢来ているので、あとでコメントをもらいます。

夏合宿後の高校選手権予選は第 2 地区大会の決勝まで進みます。連戦でしたので、大会運営後に毎日、各校の先生方でご苦労さん会をやってました。「今年の附属はいいチームだよね。明日の決勝も勝てるでしょう。負けたら中塚さんが坊主だね」という話になり、負けてしまった私が人生初の坊主頭になりました。テレビの影響か、そのころ坊主頭がはやっていたようです。唯一の単著『少年のためのサッカー入門』もこのころです。当時の部員がモデルとして登場します。

この頃のサッカー部の練習日誌があります。1993 年 10 月 28 日の日誌担当は寄田浩平さん。「まず、日本ワールドカップ出場ならず」と大きく書かれています。いわゆる「ドーハの悲劇」ですね。

この頃の思い出話と、部活動で学んだことがいまにどのようにつながっているのかを話してもらおうと思います。

まず寄田浩平さん。サッカー小僧で「宇宙少年」だった寄田さんは、国内外の研究者とともに宇宙物理学の研究をされています。研究室で若者と接する機会もある方です。

103 回生のコメント

寄田：103 回の寄田と申します。今日は同期が 5 人も来ていまして、主将も来ているので、あとで補足をしてもらいたいと思います。

先ほどから話が出ているように、中塚先生はバリバリの現役のときでした。僕はサッカーの世界がそんなに広くなかったせいか、中塚先生ぐらいサッカーが上手い人が僕のまわりにはいませんでした。あんなに走れてこんなにうまい人が世の中にいるんだと、衝撃的でした。

ただ非常に厳しかったです。いま思うとあまり褒められことはなかった気がしますが、主将も非常に厳しい人で「小なかつ」って僕らは呼んでいました。ヒラ部員は二人によって非常に鍛えられた代だったと思います。

その甲斐あってか、3 年生の春の大会では地区大会を勝ち抜き都大会に出ることができました。勝ち負けの悔しさで涙を流すということを本気でできた、仲間たちと一緒にやってきたのは、本当に大事な経験だったと思います。

僕は夏まで残りましたけども、個人的には最後までやり抜く－その定義はいろいろあると思いますが、最後までやりたかっただけなんです。受験で皆さんすごくがんばる高校ですけど、僕はあまり勉強と両立できたものじゃありませんが、最後まで部活をがんばった。その結果、浪人することになるわけですけど、それについてはまったく後悔してません。

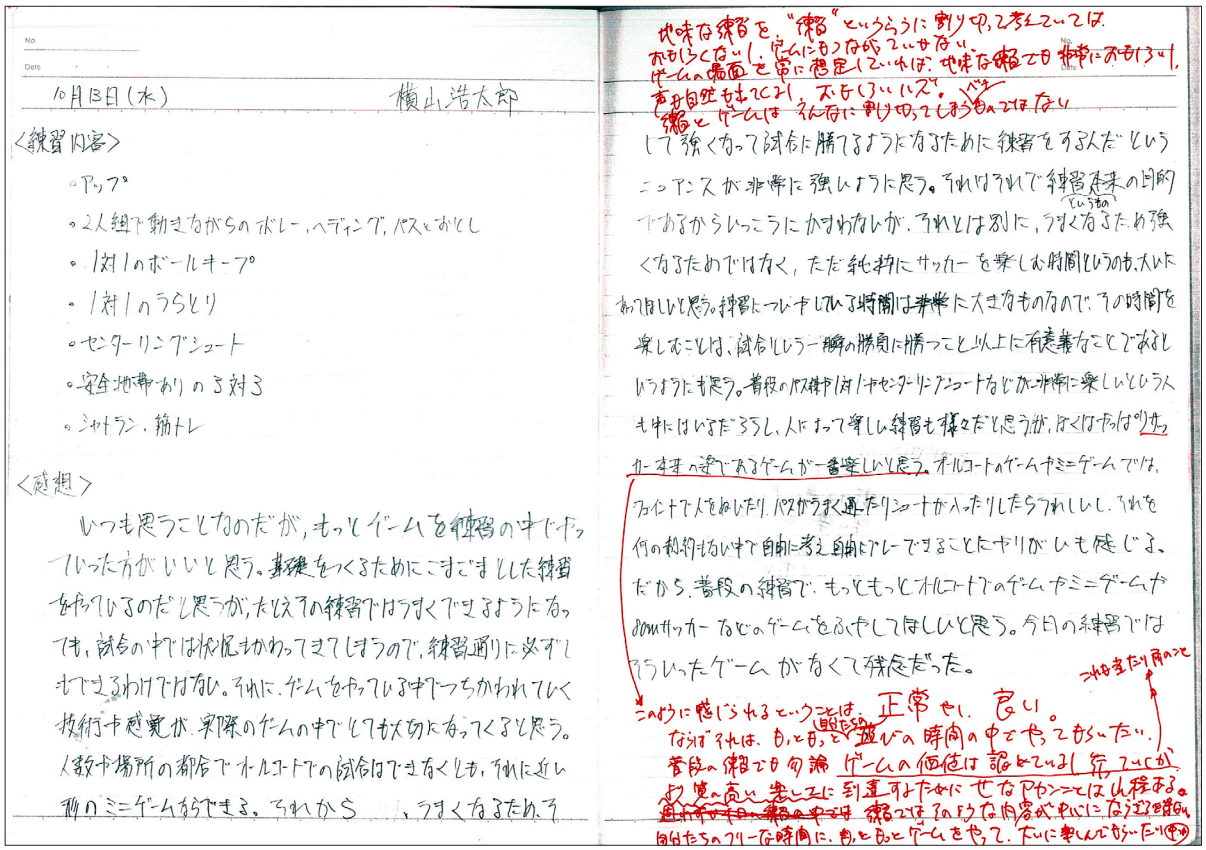
大学に入ってやり抜いたのが物理学の勉強です。もうかれこれ 30 年たちました。ここまで来ると、やり抜くってことは一体何なのかということをいま一度、高校時代の自分を重ねながら考えることもあります。

中塚先生の言葉とか高校時代の部活で学んだこととしては、それぞれの人生とかそれぞれの環境によってピックアップの仕方が違うと思うんです。私は、やり抜くこととか厳しいところを選んでいって生活していくことを学びましたけど、ある意味ワイルドカードみたいなもので、おそらく皆さんたちが持っているもの、経験として生かしているものは違うのだろうと思います。ただ僕が本当に大事にしてるのは、そういったもの、カードを 1 枚もらったということ、何か悩んだときにそのカードをぱっと見てみる、そういうものをもらったんじゃないかと思っています。

研究者をやっていると、研究と部活動が結構似ていることを感じます。大学生にとっての研究ってある意味、半分興味、面白さでやっていて、それを職業にするわけでもないみたいなところがあります。なので今回のシンポジウムを通して、そういったところをいろいろ共有しながら学びを深めていけたらと思っています。

中塚：ありがとうございます。103 回生はたくさん来ているし主将もいるんだけど、ちょっとこれを見てほしいです。10 月 13 日の練習日誌。横山浩太郎さんが書かれています。批判めいた内容です。「いつも思うことなのだが、もっとゲームを練習の中にやっていった方がいいと思う。基礎を作るためにこまごました練習をやってるのだと思うが…」という書き出しで、不平不満がいろいろ述べられています。

それに対して私もまめに、「地味な練習を“練習”というふうに割り切って考えていたらおもしろくないしゲームにもつながっていかない。ゲームの場面を常に想定していれば、地味な練習でも非常におもしろいし、声も自然に出てくるしおもしろいはず」と赤字で書いています。こういうやり取りを練習日誌の中でしているけど、読んだことないでしょう。



10月13日（水）　横山浩太郎

<練習内容>

- アップ
- 2人組で動きながらのボレー、ヘディング、パスとおとし
- 1対1のボールキープ
- 1対1のうらとり
- センターリングシュート
- 安全地帯ありの3対3
- ジョギング、筋トレ

<感想>

いつも思うことなのだが、もっとゲームを練習の中でやっていった方がいいと思う。基礎をつくるためにこまごまとした練習をやっているのだと思うが、たとえその練習ではうまくできるようになっても、試合の中では状況もかわってきてしまうので、練習通りに必ずしもできるわけではない。それに、ゲームをやっている中でつちかわれていく技術や感覚が、実際のゲームの中でもっとも効果になってくると思う。人数や場所の都合でオールコートでの試合はできなくとも、それに近い形のミニゲームならできる。それから　、うまくなるために

地味な練習を"練習"というふうに割り切って考えていては、おもしろくないし、ゲームにもつながっていかない。ゲームの価値を常に想定していれば、地味な練習でも非常におもしろく、自分自然にもなってくる。だからいいと。練習とゲームとは　そんなに割り切ってしまうものではない

して強くなって試合に勝てるようになるために練習をするんだというニュアンスが非常に強いような思う。それはそれで練習本来の目的であるからいいこうにかすめないが、それとは別に、うまくなるため（というもの）強くなるためではなく、ただ純粋にサッカーを楽しむ時間というのも、大いにあってほしいと思う。練習につぎこんでいる時間は非常に大きなものなので、その時間を楽しむことは、試合というー瞬の勝負に勝つこと以上に有意義なことであるというふうにも思う。普段のパス練や1対1やセンターリングシュートなどが非常に楽しいという人も中にはいるだろうし、人によって楽しい練習も様々だと思うが、なくなったらやっぱりサッカー本来の姿であるゲームが一番楽しいと思う。オールコートのゲームやミニゲームでは、フェイントで人をぬいたり、パスがうまく通ったりシュートが入ったりしたらうれしいし、それを何の制約もないので自由に考え自由にプレーできることにやりがいも感じる。だから、普段の練習で、もっともっとオールコートでのゲームやミニゲームや3on3サッカーなどのゲームをふやしてほしいと思う。今日の練習ではそういったゲームがなくて残念だった。

このように感じられるということは、正常やしよい。
ならばそれは、もっともっと遊びの時間の中でやってもらいたい。
普段の練習でも勿論ゲームの価値は認められるし、それがより高い高い先に到達するためにせなアかんことは山程ある。
自分たちのフリーな時間に、もっともっとゲームをやって、大いに楽しんでもらいたい。

つまり主体的のこと

みんなで回覧しているノートだから、日誌を書いた人はたぶんこれを読まないですね。

横山さん、せっかくなので、ちょっとコメントをもらいたいんだけど。

横山：103回の横山です。そうですね、全く記憶にございません（笑）。ただ、当時はこういうスタンスで取り組んでいたと思います。私はどちらかというとちょっとやらされている感じで、不平もあって、そういったところを出していました。

先ほどからいろいろお話を伺って、あまり主体的に取り組めていなかったというのは、反省ではないですけれども、あります。50年近く生きてきて、やっぱりいろんな物事に対してコツコツと、ひとよりも努力して取り組むことは苦ではないんですけど、このときは苦だったので。体が一番切れていて、いろいろ吸収できたときにそういうふうに取り組めなかったのは、反省ではないんですけど、いま思うとそうだったなっていうのを思います。

中塚：真ん中辺りに、「サッカー本来の姿であるゲームが一番楽しいと思う」とあります。それに対する私のコメントは、「このように感じられるということは、正常やしよい。ならばそれは、もっともっと自分たちの遊びの時間の中でやってもらいたい」。いまでもずっと言ってることですけど、こんなやり取りをしていました。

103回生の皆さんからほかにどうでしょうか。とくに「学んだこと」について、いかがですか。

池田：103回の池田と申します。キャプテンをやっていました。学んだことといえば、やっぱり仲間と一緒にやるということ。大人になってからなかなか感じることのない、一所懸命やるとか、青春を熱く過ごすとか、そういう部分で気持ちをかけられたのはよい経験だったと思います。それぞれ熱量は違って、横山ともよく喧嘩もしましたけど、そういうことができる仲間と一緒にやれたのはまさに青春時代ですね。非常に楽しかった思い出として捉えています。

嶋田：私は一つ明確に学ぶことがありまして。先生にちょっとお聞きしたいんですけど、歴代で私より足が速かった人はいますか？（笑）

中塚：そうやなあ、嶋田さんは3本の指には入ると思いますよ。

嶋田：私はサッカーはそんなにうまくはないかもしれないんですけど、足が速くてですね、運動靴で陸上部の大会に出て100mが11秒ゼロだったのが公式

記録に残っています。そのときに中塚先生に、「お前、足しかないから、速さだけ鍛えろ」って言われたのをすごく覚えてます。いま会社の代表をやってますけど、自分の得意なことだけ鍛えたらものすごくビジネスになったりしています。全部 70 点とか 65 点を取るよりも、1 つだけ 130 点ぐらい取って、それを突き詰めていく。そこに注力することがいかに大事かということを感じています。会社で結果を出すためには、得意なことだけ伸ばして点を取るというのも一つの方法だと思ってます。もっともっと鍛えられたのかなって思ってますけど、それは社会人になって一生懸命鍛えています。

あともう一つは、いまの若い人たちをみていいなと思うのは、私のころはちょっと悪いやつがかっこいいみたいな時代だったんですけど、いまスポーツ選手もバカまじめな奴がかっこいい時代なんですよね。大谷選手やイチロー選手がそうです。言い訳かもしれないですけど、ああいう真面目な人がかっこいいっていう時代だったら、僕はもっと伸びたんだと思ってます（会場笑）。

中塚：木田さんはいまドクターとして、母校の学校医をされています。

木田：103 回の木田と申します。私は実は高 2 の夏に、1 年早く、医者になりたいという思いが強くなりました。「スーパー内部」で小学校からずっと来たということもあって、自分で何かを決めるということがなかったところ、たぶん人生で初めて自分で選択をしました。それが「部活をやめる」ということでした。サッカー部はもちろん好きでサッカーもやりたかったんですが、1 年早くやめました。それには全く後悔はないんですが、それがモチベーションになって医師になり、好きな心臓の研究と臨床をやりながらここまで来ました。いろんなご縁があり、去年から附属高校の学校医をさせていただき、そういう意味で恩返しがいまできてるんじゃないかなと思います。

あとは、やめた人間を受け入れていただいてるっていうこともありがたいですね。はじめ中塚先生に挨拶に行くときはどうしようかと思ってドキドキして行ったんですけど、温かく迎えてくださいました。この前、日本代表のサッカーの試合を中塚先生と 2 人で見に行くことをさせていただいて、昔は考えられなかったんですが、本当にいい経験になりました。こういった場に参加できていろんな話を聞けるのもまたいいなと思います。

ありがとうございます。

中塚：卒業後も 103 回生と飲む機会がけっこうあったんですけど、木田さんは最初から受け入れてもらえていたわけじゃないよね（笑）。途中で退部した人を受け入れられなかった同級生が結構いたんじゃないかなと。そんな記憶があります。去年あたり和解できたんですかね（笑）

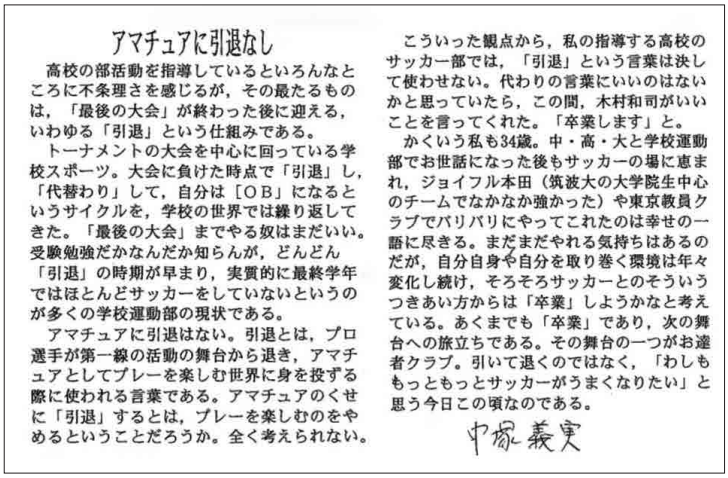
こんなペースでやってると現在にたどり着かないので、ちょっとペースアップしていきます。

2. チームからクラブへ －手探りの挑戦　（1996 ～ 2008）

1996 DUO リーグ創設－大会の位置づけ等でさまざまな議論（105 ～ 107 回）

「アマチュアに引退なし」というお題で書いた文書が出てきました。この言葉も、「迷ったらやれ」と同じくらいいろんなところで言っています。「高校の部活動を指導しているといろんなところに不条理を感じるが、その最たるものが、“最後の大会”が終わった後に迎える“引退”という仕組みである」。アマチュアに引退はありません。

右の段落へ行くと「こういった観点から、私の指導する高校のサッカー部では、“引退”という言葉は決して使わせない。代わりの言葉に



アマチュアに引退なし

高校の部活動を指導しているといろんなところに不条理さを感じるが，その最たるものは，「最後の大会」が終わった後に迎える，いわゆる「引退」という仕組みである。

トーナメントの大会を中心に回っている学校スポーツ。大会に負けた時点で「引退」し，「代替わり」して，自分は［OB］になるというサイクルを，学校の世界では繰り返してきた。「最後の大会」までやる奴はまだいい。受験勉強だかなんだか知らんが，どんどん「引退」の時期が早まり，実質的に最終学年ではほとんどサッカーをしていないというのが多くの学校運動部の現状である。

アマチュアに引退はない。引退とは，プロ選手が第一線の活動の舞台から退き，アマチュアとしてプレーを楽しむ世界に身を投ずる際に使われる言葉である。アマチュアのくせに「引退」するとは，プレーを楽しむのをやめるということだろうか。全く考えられない。

こういった観点から，私の指導する高校のサッカー部では，「引退」という言葉は決して使わせない。代わりの言葉にいいのはないかと思っていたら，この間，木村和司がいいことを言ってくれた。「卒業します」と。

かくいう私も34歳。中・高・大と学校運動部でお世話になった後もサッカーの場に恵まれ，ジョイフル本田（筑波大の大学院生中心のチームでなかなか強かった）や東京教員クラブでバリバリにやってこれたのは幸せの一語に尽きる。まだまだやれる気持ちはあるのだが，自分自身や自分を取り巻く環境は年々変化し続け，そろそろサッカーとのそういうつきあい方からは「卒業」しようかなと考えている。あくまでも「卒業」であり，次の舞台への旅立ちである。その舞台の一つがお達者クラブ。引いて退くのではなく，「わしももっともっとサッカーがうまくなりたい」と思う今日この頃なのである。

中塚義実

いいのはないかと思っていたら、この間、木村和司がいいことを言ってくれた」。彼は引退会見で「卒業します」と言ったんですね。

こういうことを含め、アタマの中にいろいろあった中の一つがこれなんです。負ければ終わりのノックアウト方式の大会しかない高校の環境は不健全だ。高橋さんの話にもあった「グッドルーザー」は、負けても次がある環境の中で育まれるのだと。

そして「ユースサッカーにリーグ戦を」ということになります。

ここから我々の部は次の段階に入っていきます。DUO リーグのある部活。そして引退なし。3 年の夏まで「残る」んじゃなくて、その前にやめる人が「やめる」です。

DUOリーグの理念
ー文化としてのサッカーのあり方ー

1. 「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ
   サッカーの生活化
2. 「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成
   チームからクラブへ
3. 強いチームとたくましい個の育成
   レベルアップ
4. サッカーをささえる人材の育成
   自主運営と受益者負担

理念を掲げました。「歯磨き感覚」とか「引退なし」「補欠ゼロ」というのは、JFA（日本サッカー協会）の取り組みにアンテナを張ってる人ならおわかりだろうと思いますが、グラスルーツのプロジェクトで掲げられるスローガンです。実はグラスルーツの担当者の方々と話をする中で「使っていいですか」と言われて、「どうぞどうぞ」と。DUO リーグの理念のほうが先にあったんです。

これは文化としてのサッカーのあり方で、当たり前のことです。ぶれない“理念”を掲げながら“魂”を受け継ぎながらずっとやっていくのだということです。

1996 年前期が第 1 回 DUO リーグです。理念を掲げ、近隣の高校やクラブユースの指導者に話をし、賛同してくれた創設 6 クラブでスタートしました。今年 100 周年をともに迎えた都立小石川、そして都立向丘、筑波大附、京華、昭和一、三菱養和。高体連だけでなくクラブユース連盟も一緒です。

各学校と高校サッカーのカレンダーを見て、4 月から 7 月の間に 9 節ぐらいは取れる、これなら 10 チーム

1996年度前期（第1回）

DUOリーグ開幕

創設6クラブ：都小石川(2)、都向丘、筑波大附(2)、京華、昭和一(3)、三菱養和

- 10チーム、1リーグ制。4～7月の週末にゲーム
- 1節5試合。1日グランド確保できれば1節できる。9節あればできる（夏休み前に充分可能）
- 昭和一は均等3チーム。筑波大附は1～2年と3年の2チーム。高体連の大会には「代表チーム」を編成

この構想を面白がる、“遊び心”ある大人たちが、“Face to Face”ああだこうだ言いながら作り上げた。

優勝…京華高校（初

ムの総当たりができるなと考えました。「筑波大附 (2)」というのは、筑波大附属から 2 チーム出るということです。103 回生や 104 回生も本日来ていますが、彼らのころになかった仕組みが、105 回生が 3 年になるときにできました。

1996年度後期（第2回）

学習院、豊南、文京区中学生選抜が加盟→9ｸﾗﾌﾞ

- 1部は各クラブの代表チーム、2部は代表外（現在はレベル別に1・2部制）
- 文京区中学生選抜が後期のみ参加（現在も）
- 筑波大附と京華の2軍が連合軍で参加
- 特別枠選手（19歳以上）は3名まで可
- 大会参加費を、1チームにつき15,000円徴収（いまは1チーム20,000円）

よい活動は自然と広がる。しかし大事なのは“理念”を共有すること。
「小さく立ち上げ、大きく育てる」
いかに続け、広げていくかを考え、実行した

優勝…三菱養和SC（

このころは大人たちもよく飲みに行って、どうすればおもしろくなるかを Face to Face ああだこうだ言い合っていました。「DUO リーグ」という名前はそういうところから生まれました。前期をやってみて「これおもろいな、後期もやろう」ということになり、学習院、豊南、文京区中学生選抜が加わります。中 3 も秋以降、やっぱり「引退」しているわけです。中学の指導者と話をし、その子たちを高校生のリーグに入れてあげました。また、筑波大学附属と京華はこのころ毎週木曜日に合同練習をしていたので、B チームの連合軍をつくって参加します。さらに、1996 年のアトランタ五輪からオーバーエイジが 3 名まで出られるようになったのを「これ使えるな」ということで採用し、DUO リーグでもオーバーエイジをありにしました。そのおかげで私も時々試合に出られるようになりました。

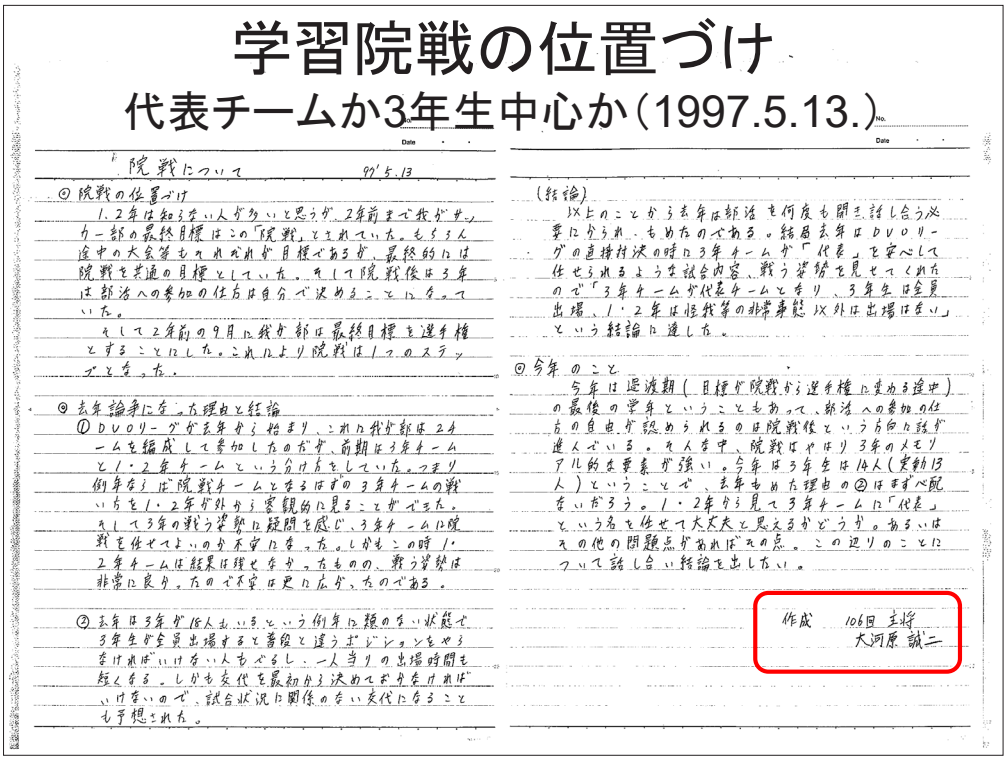
持続可能な活動にするためには、ささえる仕事を正当に評価し、ペイすることが必要です。そのために参加費を 1 チームにつき 15,000 円徴収することにしました。これについては当時の部員が噛みついてきまし

た。1名だけですが（笑）。ミーティングで時間をとって議論しました。「先生、高体連の大会はただなのに、なんでDUOリーグはお金がかかるんですか」という質問がありましたが、これは間違いです。高体連は学校からお金が出ているんです。「前期がただだったのに、後期になんでお金がいるんですか。どこにお金を使うんですか」については、全部説明しました。その部員は理解してくれましたが、納得はしません。彼らが最後に納得したのは、だいたい1チーム15人ぐらいです。チームで15,000円ということは1人1000円です。「お前ら1000円で7試合も楽しめるんやぞ。Jリーグの試合を見に行ったらなんぼや。映画見に行ったらいくらかかる？　するスポーツとしてのサッカーって安いやろ」と言ったら、その部員も納得し、彼らの小遣いから徴収しました。

今日はその部員は来ていませんが、同級生が来ているので、この前後のことをコメントしてもらいたいと思いますが、その前にもう少し。

DUOリーグは筑波大附から2チーム出ますが、高体連の大会は2チームの連合軍が「ナショナルチーム」として出ます。一方で、3年生の最後の試合とされていた学習院との定期戦にどんなチームで出るのかが大きなテーマになりました。「夏までやるのは当たり前で院戦は通過点」なので「ナショナルチームで臨むべきだ」。けど実際は夏の大会前にやめる者もいて「3年生のメモリアルチーム」という考えも出てきます。こんな議論をするようになったのがこのころです。

この文書を書いた106回主将の大河原さんと同級生の西片さんがいますので、このころのことについてのコメントをお願いします。大河原さんはコーチとしても、何代かにわたってみてくれているのでそのあたり、部活動で学んだことについてもお願いします。



学習院戦の位置づけ

代表チームか3年生中心か（1997.5.13.）

院戦について　97'5.13

◎院戦の位置づけ

1・2年は知らない人が多いと思うが、2年前まで我が部、サッカー部の最終目標はこの「院戦」とされていた。もちろん途中の大会等もそれぞれが目標であるが、最終的には院戦を共通の目標としていた。そして院戦後は3年は部活への参加の仕方は自分で決めることになっていた。

そして2年前の9月に我が部は最終目標を選手権とすることにした。これにより院戦は1つのステップとなった。

◎去年論争になった理由と結論

①DUOリーグが去年から始まり、これに我が部は2チームを編成して参加したのが、前期は3年チームと1・2年チームという分け方をしていた。つまり例年なら院戦チームとなるはずの3年チームの戦いぶりを1・2年が外から客観的に見ることができた。そして3年の戦う姿勢に疑問を感じ、3年チームに院戦を任せてよいのか不安になった。しかもこの時1・2年チームは結果は残せなかったものの、戦う姿勢は非常に良く、たので不安は更に広がったのである。

②去年は3年が16人もいるという例年に類のない状態で3年生が全員出場すると普段と違うポジションをやらなければいけない人もでるし、一人当りの出場時間も短くなる。しかも交代を最初から決めておかなければいけないので、試合状況に関係のない交代になることも予想された。

（結論）

以上のことから去年は部活でも何度も開き、話し合う必要に迫られ、もめたのである。結局去年はDUOリーグの直接対決の時に3年チームが「代表」を安心して任せられるような試合内容、戦う姿勢を見せてくれたので「3年チームが代表チームとなり、3年生は全員出場、1・2年は怪我等の非常事態以外は出場はない」という結論に達した。

◎今年のこと

今年は過渡期（目標が院戦から選手権に変わる途中）の最後の学年ということもあって、部活への参加の仕方の自由が認められるのは院戦後という方向性が進んでいる。それ故中、院戦はやはり3年のメモリアル的な要素が強い。今年は3年生は16人（実動13人）ということで、去年もめた理由の②はまずへ配ないだろう。1・2年から見て3年チームに「代表」という名を任せて大丈夫と思えるかどうか。あるいはその他の問題点があればその点。この辺りのことについて話し合い結論を出したい。

作成　106回 主将
大河原 誠二

■106回生のコメント　－DUOリーグが始まったころ

大河原：106回の大河原です。DUOリーグが始まった初年度は、3年生でAチーム、1、2年生でBチームの2チームで出ていました。練習試合や大会に出るときは、代表チームとして1・2年生が何人か混ざって3年生主体のAチームの試合があって、その後でB戦があるという構成でしたけど、DUOリーグでAとBを学年で分けたチームでやることになって、3年生のゲームを1・2年生がみる機会ができて、院戦にどういうチームで出るかという議論が活発化した背景がありました。

環境面で何がこの頃変わったかと、単純に試合の数が増えて、ほぼ毎週グラウンドでサッカーしているように変わったというのもあります。高校生のときはあまり考えられてなかったんですけど、その後コーチとしてかかわり、その後もずっと部活に関わらせてもらって考えると、DUOリーグが始まった

ことによって、プレーする以外の、たとえば審判をすることだったり、運営に関わることだったり教える側だったり、いろんな側面のところを経験する機会が増えたのかなと私は思います。

西片さんよろしく。

西片：西片です。喋るつもりがないままここに来たので振られてびっくりしていますが、DUO リーグが始まって、単純に私は嬉しかったです。その頃の私は、いわゆる代表チームの補欠にいたり、代表チームに出られないときが多々あり、試合の日に学校に来ても試合に出られるかな、どうかなというのがあったのですが、DUO リーグが始まって必ず試合に出るというところで、より練習に励むことができたというのがあります。

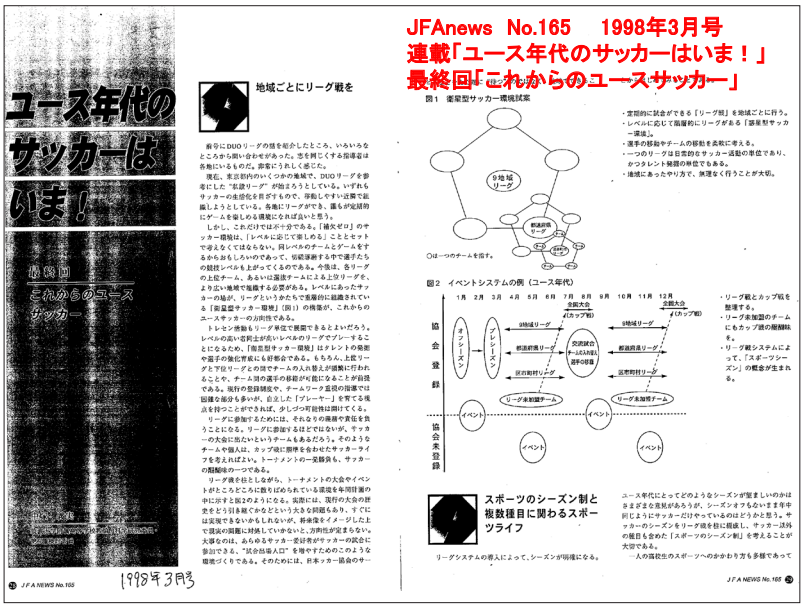
大河原さんは高校のコーチとしてずっと関わっていくんですが、私も卒業して理学療法士になり、「DUO リーグトレーナー」を拝命して運営にも関わらせていただきました。部活からというよりも、DUO リーグから学んだことはすごく大きいなと思っております。

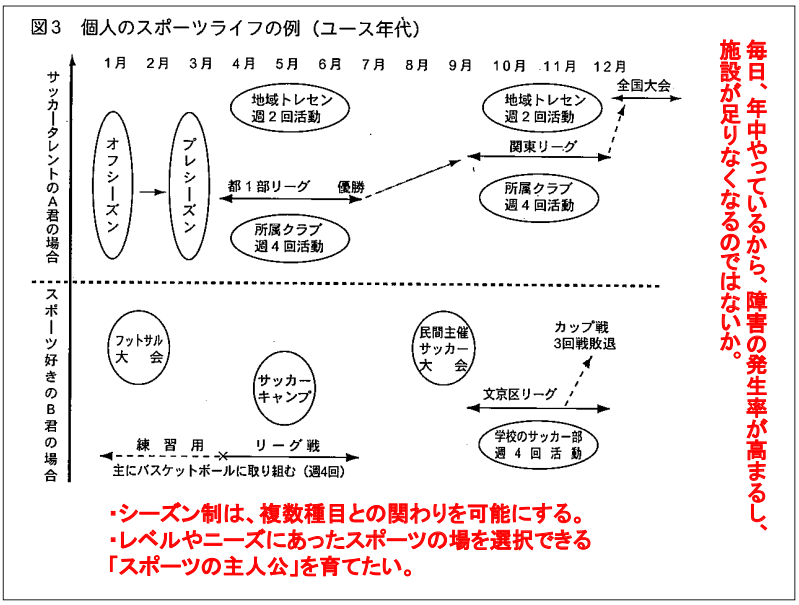
中塚：ありがとうございます。このころはいろんなことで話し合いの時間をとりました。時間があれば詳しく取り上げたいのですが、たとえば退部者をめぐる議論。ある部員が、自分はサッカーが上手くない。練習をやっていても皆の足を引っ張るだけだからやめますと言ってきたときに、練習をやめて全体ミーティングをするなど、いろいろありました。一人ひとりを大事にするというと大げさですが、ここはこだわっていましたね。それが部の文化なのだと思います。

スライドは、JFA 機関誌『JFA news』の連載「ユース年代のサッカーはいま」の最終回からの引用です。1997 年 6 月号（156 号）から 1998 年 3 月号（165 号）まで計 8 回にわたって連載し、DUO リーグからはじまるリーグ構想や筑附高蹴球部の取り組みなどを紹介しました。いまバレーボールやバスケットボールでもユースリーグをやろうとしていますけど、少なくとも私は、サッカーだけでこれを完結させるとは全く思っておらず、他のスポーツに広げていく構想を持っていました。たとえばスポーツ好きの B 君は、前期はバスケットボール、後期はサッカーのリーグに関わるような環境ができればいいなと考えていました。

「毎日、年中やっているから、障害の発生率が高まるし、施設が足りなくなる」というようなことをいろんなところで言っていましたが、なかなか定着しません。いまの DUO リーグもそうですが、試合数を確保すること、マニュアルやルールだけが伝わり、“理念” や “魂” がなかなか広がっていかないもどかしさがあります。

ということで、ここまで「チームからクラブへ」の中で DUO リーグ創設期の話をしました。





■ 1998 校内フットサル大会初開催－「引退なし」をめぐる葛藤・合宿地変更等（108 ～ 110 回）

■ 2000 女子部創設・3 部門確立－「クラブ」として成長（111 ～ 113 回）

■ 2008 手探りでクラブを活性化－ 117 回サッカー部の進化（114 ～ 117 回）

1996夏合宿（105回～107回）
・4月にDUOリーグ発足
・「院戦チーム」で大議論
・「夏までやるのが当たり前」
「高いレベルでの両立を」
＝ サッカーの生活化
（勉強も）
※105回生は3年次のみ担任
※フットサル部門誕生の兆し

「校内フットサル大会」「女子部創設・3 部門確立」。このころが手探りでいろいろチャレンジしていた時代です。

106 回生がいた頃の写真です。下が 105 回生の写真ですね。

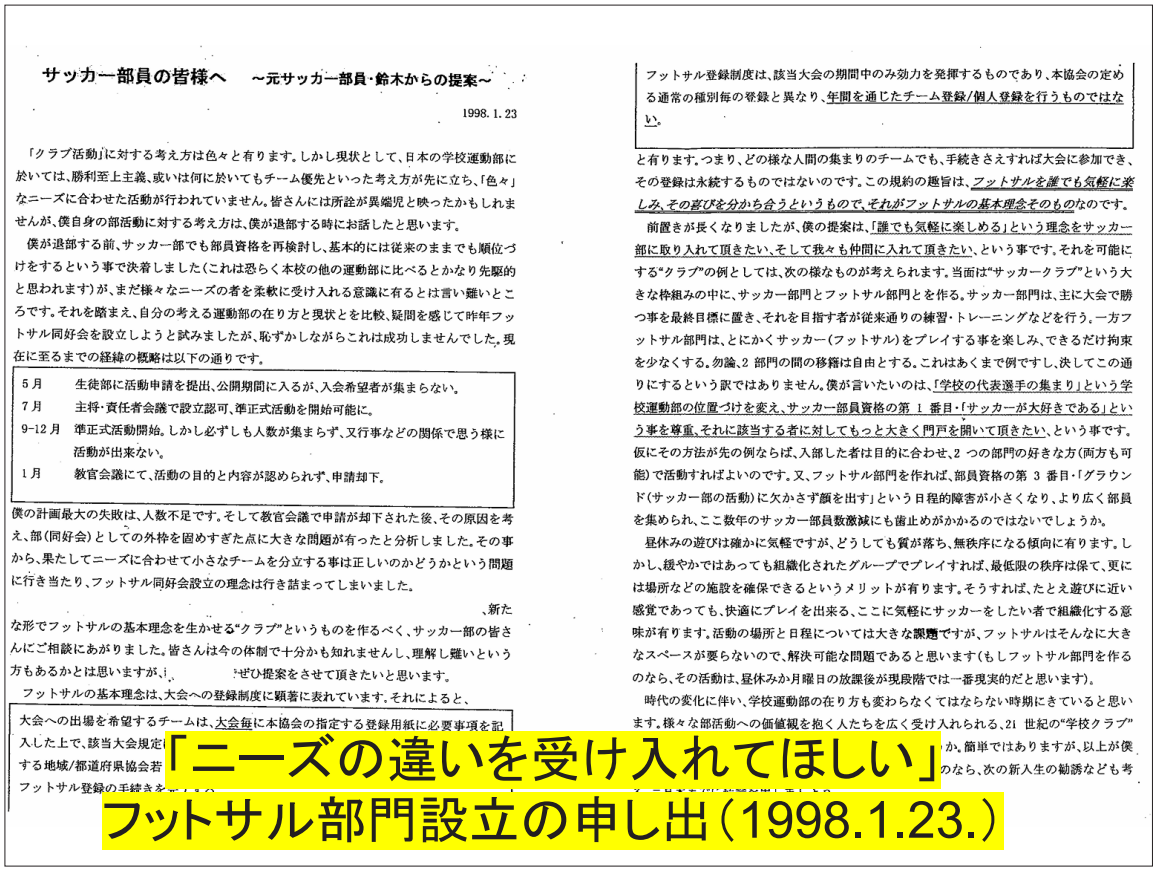
フットサル部誕生の契機となった「サッカー部員の皆様へ」という文書があります。そもそもニーズの違いでした。

107 回生、先ほどの二人の 1 学年下のサッカー部員・鈴木君は、サッカーは好きだけど競技志向で続けるのはちょっとしんどい。楽しみ志向でやりたいんだと。先ほどの横山さんの感覚に近いものかもしれません。

彼はいったんサッカー部をやめて、楽しみ志向のフットサル同好会設立運動に取り組みますが、この運動は広がらないまま頓挫します。当時はフットサルというスポーツが生まれたころでした。改めてサッカー部のミーティングに来て、「プレイ志向でフットサルを楽しめる部門を作りませんか」と提案したときの文書です。「ニーズの違いを受け入れてほしい」という主張です。

この背景には、106 回生のころにあった部員資格をめぐる議論がありました。サッカー部はそもそもサッカー（Football）が大好きな人たちが集まる場であるはず。それならば競技志向であってもプレイ志向であっても受け入れていいじゃないかということです。熱い議論を経て、最終的には受け入れることになり、サッカー部の中に「フットサル部門」ができました。

けど、できはしたけどメンバーはほとんどいません。



サッカー部員の皆様へ　～元サッカー部員・鈴木からの提案～

1998. 1. 23

「クラブ活動」に対する考え方は色々と有ります。しかし現状として、日本の学校運動部に於いては、勝利至上主義、或いは何に於いてもチーム優先といった考え方が先に立ち、「色々」なニーズに合わせた活動が行われていません。皆さんには所詮が異端児と映ったかもしれませんが、僕自身の部活動に対する考え方は、僕が退部する時にお話したと思います。

僕が退部する前、サッカー部でも部員資格を再検討し、基本的には従来のままでも順位づけをするという事で決着しました（これは恐らく本校の他の運動部に比べるとかなり先駆的と思われます）が、まだ様々なニーズの者を柔軟に受け入れる意識に有るとは言い難いところです。それを踏まえ、自分の考える運動部の在り方と現状とを比較、疑問を感じて昨年フットサル同好会を設立しようと試みましたが、恥ずかしながらこれは成功しませんでした。現在に至るまでの経緯の概略は以下の通りです。

5月	生徒部に活動申請を提出、公開期間に入るが、入会希望者が集まらない。
7月	主将・責任者会議で設立認可、準正式活動を開始可能に。
9-12月	準正式活動開始。しかし必ずしも人数が集まらず、又行事などの関係で思う様に活動が出来ない。
1月	教官会議にて、活動の目的と内容が認められず、申請却下。

僕の計画最大の失敗は、人数不足です。そして教官会議で申請が却下された後、その原因を考え、部（同好会）としての外枠を固めすぎた点に大きな問題が有ったと分析しました。その事から、果たしてニーズに合わせて小さなチームを分立する事は正しいのかどうかという問題に行き当たり、フットサル同好会設立の理念は行き詰まってしまいました。

、新たな形でフットサルの基本理念を生かせる"クラブ"というものを作るべく、サッカー部の皆さんにご相談にあがりました。皆さんは今の体制で十分かも知れませんし、理解し難いという方もあるかとは思いますが、ぜひ提案をさせて頂きたいと思います。

フットサルの基本理念は、大会への登録制度に顕著に表れています。それによると、

大会への出場を希望するチームは、大会毎に本協会の指定する登録用紙に必要事項を記入した上で、該当大会規定
する地域/都道府県協会若
フットサル登録の手続きを

フットサル登録制度は、該当大会の期間中のみ効力を発揮するものであり、本協会の定める通常の種別毎の登録と異なり、年間を通じたチーム登録/個人登録を行うものではない。

と有ります。つまり、どの様な人間の集まりのチームでも、手続きさえすれば大会に参加でき、その登録は永続するものではないのです。この規約の趣旨は、*フットサルを誰でも気軽に楽しみ、その喜びを分かち合うというもので、それがフットサルの基本理念そのもの*なのです。

前置きが長くなりましたが、僕の提案は、「誰でも気軽に楽しめる」という理念をサッカー部に取り入れて頂きたい、そして我々も仲間に入れて頂きたい、という事です。それを可能にする"クラブ"の例としては、次の様なものが考えられます。当面は"サッカークラブ"という大きな枠組みの中に、サッカー部門とフットサル部門とを作る。サッカー部門は、主に大会で勝つ事を最終目標に置き、それを目指す者が従来通りの練習・トレーニングなどを行う。一方フットサル部門は、とにかくサッカー（フットサル）をプレイする事を楽しみ、できるだけ拘束を少なくする。勿論、2 部門の間の移籍は自由とする。これはあくまで例ですし、決してこの通りにするという訳ではありません。僕が言いたいのは、「学校の代表選手の集まり」という学校運動部の位置づけを変え、サッカー部員資格の第 1 番目・「サッカーが大好きである」という事を尊重、それに該当する者に対してもっと大きく門戸を開いて頂きたい、という事です。仮にその方法が先の例ならば、入部した者は目的に合わせ、2 つの部門の好きな方（両方も可能）で活動すればよいのです。又、フットサル部門を作れば、部員資格の第 3 番目・「グラウンド（サッカー部の活動）に欠かさず顔を出す」という日程的障害が小さくなり、より広く部員を集められ、ここ数年のサッカー部員数激減にも歯止めがかかるのではないでしょうか。

昼休みの遊びは確かに気軽ですが、どうしても質が落ち、無秩序になる傾向に有ります。しかし、緩やかではあっても組織化されたグループでプレイすれば、最低限の秩序は保て、更には場所などの施設を確保できるというメリットが有ります。そうすれば、たとえ遊びに近い感覚であっても、快適にプレイを出来る、ここに気軽にサッカーをしたい者で組織化する意味が有ります。活動の場所と日程については大きな課題ですが、フットサルはそんなに大きなスペースが要らないので、解決可能な問題であると思います（もしフットサル部門を作るのなら、その活動は、昼休みか月曜日の放課後が現段階では一番現実的だと思います）。

時代の変化に伴い、学校運動部の在り方も変わらなくてはならない時期にきていると思います。様々な部活動への価値観を抱く人たちを広く受け入れられる、21 世紀の"学校クラブ"
か。簡単ではありますが、以上が僕
のなら、次の新入生の勧誘なども考

「ニーズの違いを受け入れてほしい」
フットサル部門設立の申し出（1998.1.23.）

1998夏合宿（107～109回）
最後の高萩大心苑

1998フランス大会に日本が初出場。中塚も初出場
「昼休みサッカー人口」増
⇒6月に「桐陰フットサルワールドカップ」をクラブで主催
「フットサル部門」に特定の部員はいなかったが、
校内フットサル大会の主催を通してフットサル好きを増やすことに貢献

そこに 1998 年 FIFA ワールドカップ・フランス大会に日本が初出場し、昼休みサッカー人口が激増するできごとが起こります。これを組織化して「桐陰フットサルワールドカップ」が開かれました。昼休みのフットサル大会で、いまも続いています。

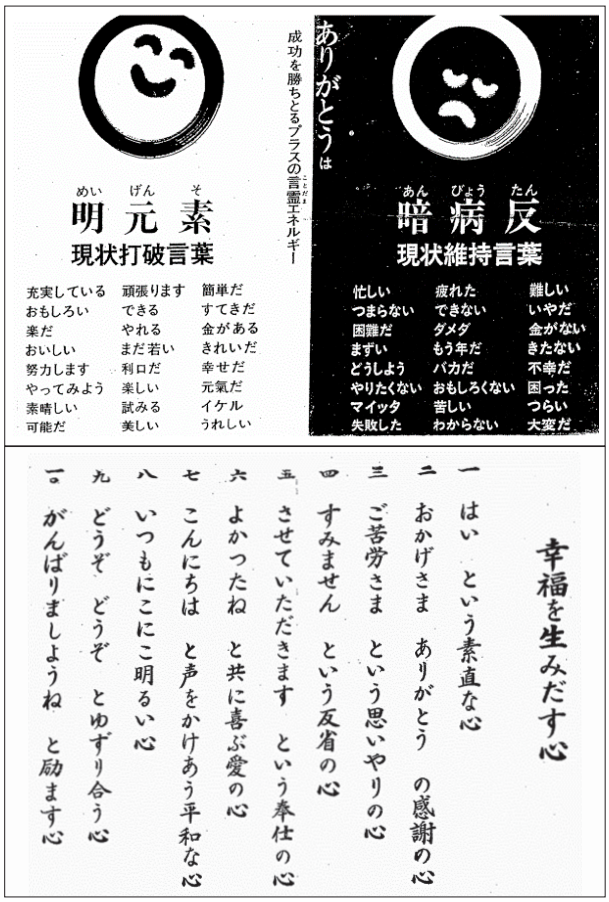
今日は高校 2 年生と 1 年生も来ていますが、ついこないだまで彼らが運営してコート面で行われていました。写真はグラウンドで盛大に行われていたころのものです。Teachers が優勝したこともありました。

1999夏合宿　108～110回
初の波崎　＝　天然芝を求めて
芝生で「インステップキックができるようになった！」

「夏までやるのが当たり前」なのに、3年生（108回）は2名のみ…
院戦でほとんどの運動部員が「引退」宣言
悩める高校3年生…

そんなことをやっていたのが 108 回生前後の部員です。このころのサッカー部は「夏までやるのが当たり前」だったのですが、いつの時代も悩める高校 3 年生です。108 回生で夏までやったのは○印のついている 2 名だけでした。

事前アンケートの中で 108 回生の白根さん、いまはアーティスととして活躍され、保持さんとともに今夏の蹴球部「親子勉強会」で話をしてくれた方ですが、当時「暗病反男と言われていた」という言葉がありました（補足①参照）。卒業生は見たことがあると思いますが、ミーティングなどでこの「明言素と暗病反」を配り、忙しい、疲れた、難しいというような言葉を使ったらあかん。勢いの出る言葉を使おうと言っていました。「幸福を生み出す心」も同じく部活で配り、こういう言葉で互いに言葉をかけ合おうと言っていました。



明元素（めいげんそ）
現状打破言葉

充実している　頑張ります　簡単だ
おもしろい　できる　すてきだ
楽だ　やれる　金がある
おいしい　まだ若い　きれいだ
努力します　利口だ　幸せだ
やってみよう　楽しい　元氣だ
素晴しい　試みる　イケル
可能だ　美しい　うれしい

成功を勝ちとるプラスの言霊（ことだま）エネルギー

ありがとうは

暗病反（あんびょうたん）
現状維持言葉

忙しい　疲れた　難しい
つまらない　できない　いやだ
困難だ　ダメダ　金がない
まずい　もう年だ　きたない
どうしよう　バカだ　不幸だ
やりたくない　おもしろくない　困った
マイッタ　苦しい　つらい
失敗した　わからない　大変だ

幸福を生みだす心

一　はい　という素直な心
二　おかげさま　ありがとう　の感謝の心
三　ご苦労さま　という思いやりの心
四　すみません　という反省の心
五　させていただきます　という奉仕の心
六　よかったね　と共に喜ぶ愛の心
七　こんにちは　と声をかけあう平和な心
八　いつもにこにこ明るい心
九　どうぞ　どうぞ　とゆずり合う心
十　がんばりましょうね　と励ます心

もう少し進めてから 111 回の話に行きますね。

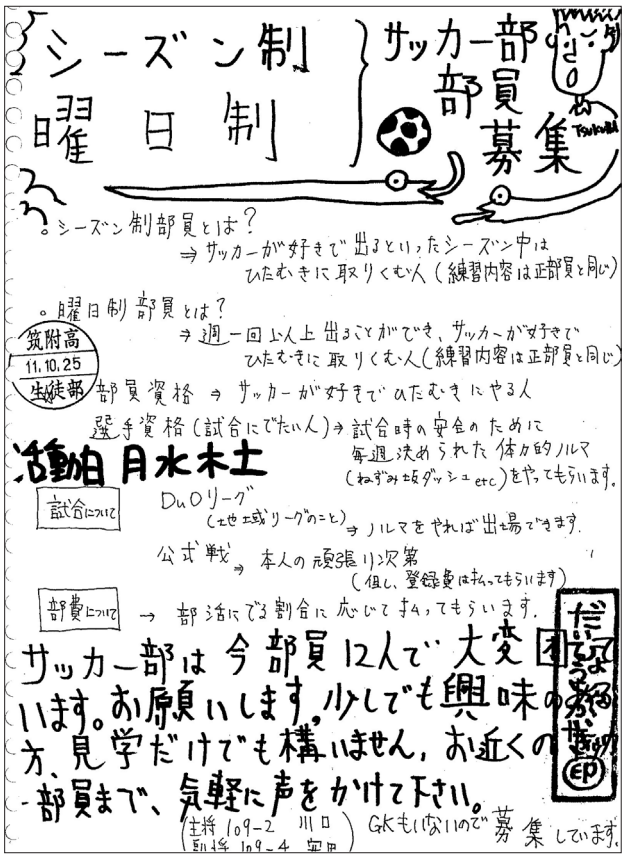
110 回生は全部で 11 人です。プレイ志向の部門ができたので、そちらに流れていったのです。競技志向の部員は、2 学年で 11 人しかいません。こんな状況で「曜日制部員制度」を導入し、顧問が職員会議のため練習に出られない「月曜部員」を募集しました。「サッカー部はいま部員 12 人で大変困っています。お願いします。少しでも興味のある方、見学だけでも構いません。お近くの部員まで気軽に声をかけてください」とあります。けど、なかなか増えませんでした。

その次の学年が 111 回生で、サッカー部に熱い連中が大勢入部し、女子部員も 5 名入部します。女子は翌年も 5 名入部し、フットサルのゲームができるようになり、いまに至ります。フットサルマガジン『ピヴォ』でも紹介されました。このころは日韓共催の 2002 年 FIFA ワールドカップへ向けてサッカー界全体が非常に盛り上がっていた時期です。

そして筑波大学附属高校蹴球部も次の段階へ向かいます。3 部門をまとめるクラブ長を置き、多様な取り組みを開始します。

111 回生卒業アルバムの写真の中で、〇で囲った金髪のお兄さんが本日、UAE のドバイから駆け付けてくれた初代クラブ長の小野塚さんです。2002 年のワールドカップへ向けて、JFA の Kick Together 事業に応募して休日にフットサル大会を企画したり、パブリックビューイングをやってみたり、いろんな企画をしましたね。広報誌も作っていました。同期のサッカー部主将も来ています。

まずは小野塚さんからお願いします。



■ 111 回生のコメント

小野塚：111 回卒業の小野塚と申します。

部活動から何を学んだかというテーマについて、卒業生アンケートに記入しながら、また他の人が書かれたものを読みながら思ったのは、白根先輩のアンケート回答にもありましたが、やはり精神論的なところがすごく多いかなと思っています。心を強く持つことや、辛くなった時にどう判断するかといいうようなことです。

ただ、先ほどの朝倉さんのお話をお聞きしながら思ったのは、例えばスポーツってすごく魅惑・魅了されるところがあります。でもそれって部活動じゃなくてスポーツの話だと思います。精神論的なものも、部活動でないと得られないものだったのかということを、話をお聞きしながらずっと考えていました。ではなぜ部活動なのかと振り返ったときに、例えば僕らの世代であれば、学校外のクラブチームに行くことも選択肢としてはあったと思います。ただ、クラブチームに行くには、そこのセクションに受かる実力が求められます。それに対して部活動では、うまくなくても自分の気持ちさえあればそこでできるという、受け皿的な要素が非常に大きかったと思います。そこが先生がご説明された「クラブ」というところにも繋がってきます。先ほどから出ていたプ

レイ志向のフットサル部門。競技志向ではない人たちとも一緒に過ごせる場だったりするわけです。

「クラブ」というプラットフォームは、僕たち 111 回が入ったときに自分たちで考えたものでは全くありません。先輩たちが先生のもとでいろいろと考えてきたことが、たまたま僕たちの代のところでより組織化し、活動を広げていくことに繋がったのだと考えます。

そのときに先生からご指導いただいたのが、部活に属している人たちだけじゃなくて、サッカーを好きだと思っている人たちはみんな、概念的にはクラ

ブのメンバー、仲間なんだということです。部活動のところと重なりつつ、もうちょっと拡張的な感じで、サッカーが好きな人たちの受け皿としてクラブというものを活動しやすいように組織化していきましょうという流れだったんですね。

精神論的に何を学んだかというところがありましたけど、もう少し派生して部活動で何を学ぶかということについては、仲間を取り込んで、その人たちとどう一緒に活動していくかに取り組めたのは貴重でした。例えば、サッカー部でサッカーをやってます、部活動で走っていますだけでなく、その枠に入らないような経験が、クラブの活動としてできたことは素晴らしかったと思います。

ユニークだったのは、やはり女子部が創設されたということです。これもいまコメントしたことに通じるものがあります。創設の主導だったのが井上円佳さん、卒業アルバム上段の右から２人目の女性ですが、彼女を筆頭に他のメンバーも、「女子部がないのなら作ればいいじゃないか」と、つくってしまいました。

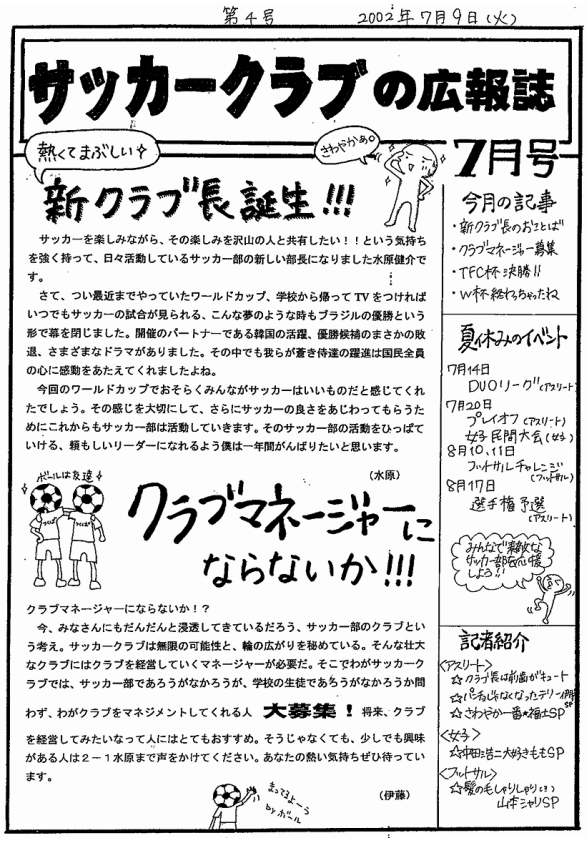
先生が先ほど言われたワールドカップのパブリックビューイングも、「やってみたらええやん」と。高校生なので全部自分たちでできるわけではなく、先生についていただいたりしながら、ある先生に激怒されたこともありましたけど、そういったご指導をいただきながらやってみることができたのも、一つの経験として、学んだことが大きかったなと感じています。

中塚：同期のサッカー部主将、大澤さんもおられます。どうでしょうか？

大澤：111 回の大澤と申します。小野塚くんがいろいろ話してくれましたけど、僕は全然そんなこと考えてなくて、ただひたすら勝ちたい、負けたくない、もっとうまくなりたいっていう気持ちだけでずっとやっていました。「小野塚もそんなごちゃごちゃやってないで、早くグランドに出て、走ってボール蹴れよ」とずっと思っていました。20 年経って、「小野塚はこんなにいろんなことを考えてやってたのか」というのをいま知って、久しぶりに来てよかったなと思っております。ありがとうございます。

中塚：これは、111 回から 112 回にクラブ長が代替わりしたときのサッカークラブの広報誌です。こういうものを定期的につくって全校生徒に配っていたのがこのころです。「校内のフットボールを盛り上げよう」と、いろいろやっていましたね。

続けます。



第４号　2002年7月9日（火）

サッカークラブの広報誌

熱くてまぶしい☆　さわやかあの　7月号

新クラブ長誕生!!!

サッカーを楽しみながら、その楽しみを沢山の人と共有したい！！という気持ちを強く持って、日々活動しているサッカー部の新しい部長になりました水原健介です。

さて、つい最近までやっていたワールドカップ、学校から帰って TV をつければいつでもサッカーの試合が見られる、こんな夢のような時もブラジルの優勝という形で幕を閉じました。開催のパートナーである韓国の活躍、優勝候補のまさかの敗退、さまざまなドラマがありました。その中でも我らが蒼き侍達の躍進は国民全員の心に感動をあたえてくれましたよね。

今回のワールドカップでおそらくみんながサッカーはいいものだと感じてくれたでしょう。その感じを大切にして、さらにサッカーの良さをあじわってもらうためにこれからもサッカー部は活動していきます。そのサッカー部の活動をひっぱっていける、頼もしいリーダーになれるよう僕は一年間がんばりたいと思います。

（水原）

ボールは友達☆

クラブマネージャーにならないか!!!

クラブマネージャーにならないか！？

今、みなさんにもだんだんと浸透してきているだろう、サッカー部のクラブという考え。サッカークラブは無限の可能性と、輪の広がりを秘めている。そんな壮大なクラブにはクラブを経営していくマネージャーが必要だ。そこでわがサッカークラブでは、サッカー部であろうがなかろうが、学校の生徒であろうがなかろうか問わず、わがクラブをマネジメントしてくれる人 **大募集！** 将来、クラブを経営してみたいなって人にはとてもおすすめ。そうじゃなくても、少しでも興味がある人は２－１水原まで声をかけてください。あなたの熱い気持ちぜひ待っています。

まってるよーっ by ボール

（伊藤）

今月の記事

・新クラブ長のおっとっぱ!!
・クラブマネージャー募集
・TFC杯決勝!!
・W杯終わっちゃったね

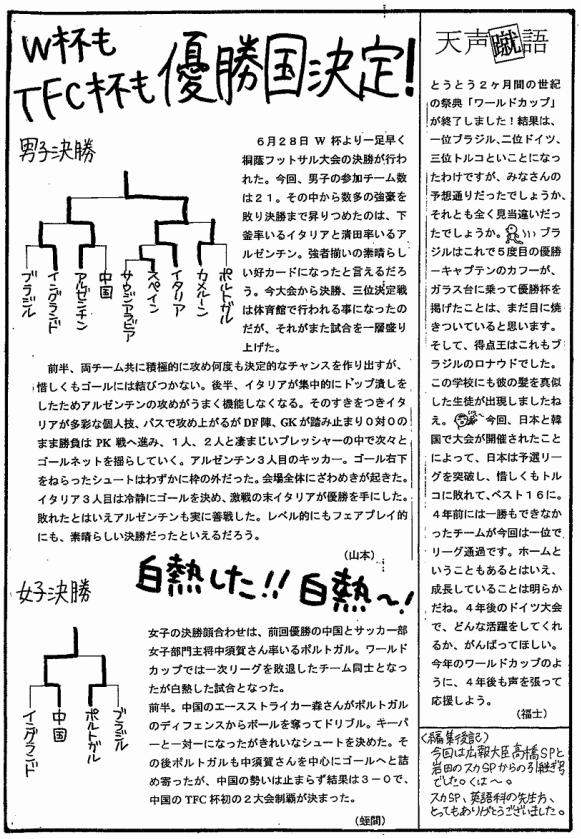
夏休みのイベント

7月14日 DUOリーグ!!（アスリート）
7月20日 プレイオフ（アスリート）
女子 民間大会（女子）
8月10、11日 フットサルチャレンジ（フットサル）
8月17日 選手権予選（アスリート）

みんなで楽しくなるサッカー部作ろう!!

記者紹介

〈アスリート〉
☆クラブ長は前歯がキュート
☆パーカーはなくなったデリーパ
☆さわやか一番☆福士SP
〈女子〉
☆中田は結二大好きももSP
〈フットサル〉
☆髪の毛しゅりしゅりくるくる 山本ミャリSP



W杯もTFC杯も優勝国決定!

男子決勝

６月２８日 W 杯より一足早く桐藤フットサル大会の決勝が行われた。今回、男子の参加チーム数は２１。その中から数多の強豪を敗り決勝まで昇りつめたのは、下釜率いるイタリアと清田率いるアルゼンチン。強者揃いの素晴らしい好カードになったと言えるだろう。今大会から決勝、三位決定戦は体育館で行われる事になったのだが、それがまた試合を一層盛り上げた。

前半、両チーム共に積極的に攻め何度も決定的なチャンスを作り出すが、惜しくもゴールには結びつかない。後半、イタリアが集中的にドッブ潰しをしたためアルゼンテンの攻めがうまく機能しなくなる。そのすきをつきイタリアが多彩な個人技、パスで攻め上がるが DF 陣、GK が踏み止まり０対０のまま勝負は PK 戦へ進み、１人、２人と凄まじいプレッシャーの中で次々とゴールネットを揺らしていく。アルゼンチン３人目のキッカー。ゴール右下をねらったシュートはわずかに枠の外だった。会場全体にざわめきが起きた。イタリア３人目は冷静にゴールを決め、激戦の末イタリアが優勝を手にした。敗れたとはいえアルゼンチンも実に善戦した。レベル的にもフェアプレイ的にも、素晴らしい決勝だったといえるだろう。

（山本）

女子決勝　白熱した!! 白熱〜!

女子の決勝顔合わせは、前回優勝の中国とサッカー部女子部門主将中須賀さん率いるポルトガル。ワールドカップでは一次リーグを敗退したチーム同士となったが白熱した試合となった。

前半。中国のエーストライカー森さんがポルトガルのディフェンスからボールを奪ってドリブル。キーパーと一対一になったがきれいなシュートを決めた。その後ポルトガルも中須賀さんを中心にゴールへと詰め寄ったが、中国の勢いは止まらず結果は３－０で、中国の TFC 杯初の２大会制覇が決まった。

（蛭間）

天声蹴語

とうとう２ヶ月間の世紀の祭典「ワールドカップ」が終了しました！結果は、一位ブラジル、二位ドイツ、三位トルコといことになったわけですが、みなさんの予想通りだったでしょうか、それとも全く見当違いだったでしょうか。ブラジルはこれで５度目の優勝ーキャプテンのカフーが、ガラス台に乗って優勝杯を掲げたことは、まだ目に焼きついていると思います。そして、得点王はこれもブラジルのロナウドでした。この学校にも彼の髪を真似した生徒が出現しましたね。今回、日本と韓国で大会が開催されたことによって、日本は予選リーグを突破し、惜しくもトルコに敗れて、ベスト１６に。４年前には一勝もできなかったチームが今回は一位でリーグ通過です。ホームということもあるとはいえ、成長していることは明らかだね。４年後のドイツ大会で、どんな活躍をしてくれるか、がんばってほしい。今年のワールドカップのように、４年後も声を張って応援しよう。

（福士）

〈編集後記〉
今回は広報大臣 赤橋SPと岩田のスカSPからのうれしいお知らせでしょ。くはは〜。
スカSP、英語利の先生方、とってもありがとうございました。

■ メディアでの紹介

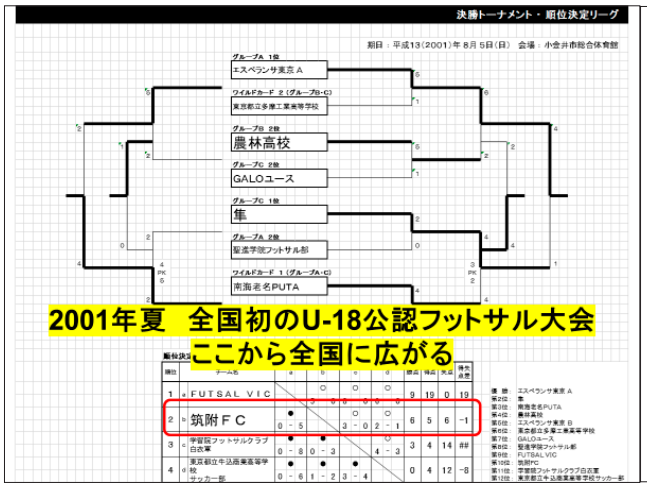
この頃、DUO リーグやサッカークラブのことが新聞に何度か取り上げられました。読売新聞の記事には、競技志向のサッカー部、当時「アスリート部門」と言っていましたけど、そこからフットサル部門に移って活動を続けた部員のインタビューが載っています。日経新聞の記事は反響が大きく、いろんなところから問い合わせや連絡をもらいました。

校内フットサル大会も朝日新聞で取り上げられました。ワールドカップの出場国名でやった時の記事です。また『サッカークリニック』（2003 年 5 月号）には私のインタビューが掲載されました。

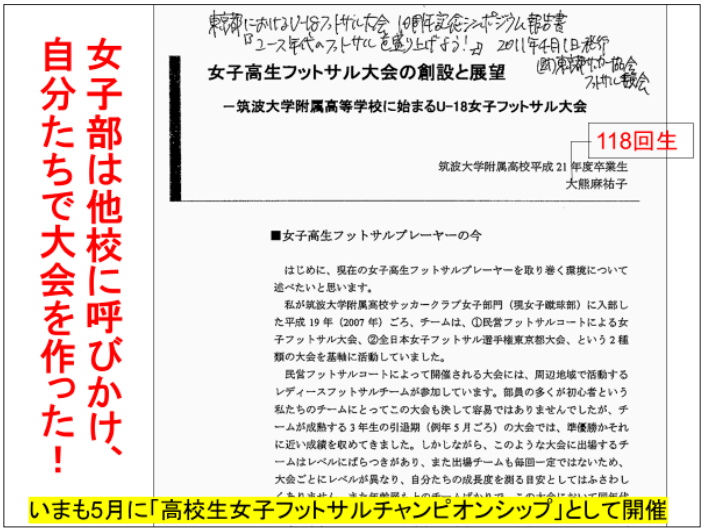
■ U-18 フットサルへの取り組み

フットサルのほうも、このころ動き出しました。私は東京都サッカー協会フットサル委員会の創設期からのメンバーで、ユース年代をずっと担当しています。2001 年夏に、全国初の U-18 公認フットサル大会をはじめました。いまでは全国に広がる大会の起点と言えるでしょう。本校体育館はフットサルの聖地となっています。

一方、女子部門もこの頃から公式大会に出るようになりますが、高校生年代の大会はなく、大人の大会に出させてもらっていました。相手は大人ですからボロ負けの連続です。初めて公式戦で勝利したのが 2004 年 3 月の第 4 回東京都女子フットサル大会です。相手はハロー！プロジェクトの芸能人チームでした。



高校生年代の大会がなかった彼女たちは、だいぶ後の話となりますが 118 回生のときに、他校に呼びかけて自分たちで女子高生大会をつくりました。いまも 5 月に「高校生女子フットサルチャンピオンシップ」という名前で続いています。高校 3 年生が活動に区切りをつける大会を自分たちで主催しています。ただこの大会も、立ち上げのころはよかったのですが、途中から大人への依存傾向が強まり、自分たちでやろうとしない数年間がありました。コロナ前からみられた傾向です。


女子部は他校に呼びかけ、自分たちで大会を作った！

女子高生フットサル大会の創設と展望

―筑波大学附属高等学校に始まるU-18女子フットサル大会

118回生

筑波大学附属高校平成 21 年度卒業生
大熊麻祐子

■女子高生フットサルプレーヤーの今

はじめに、現在の女子高生フットサルプレーヤーを取り巻く環境について述べたいと思います。

私が筑波大学附属高校サッカークラブ女子部門（現女子蹴球部）に入部した平成 19 年（2007 年）ごろ、チームは、①民営フットサルコートによる女子フットサル大会、②全日本女子フットサル選手権東京都大会、という 2 種類の大会を基軸に活動していました。

民営フットサルコートによって開催される大会には、周辺地域で活動するレディースフットサルチームが参加しています。部員の多くが初心者という私たちのチームにとってこの大会も決して容易ではありませんでしたが、チームが成熟する 3 年生の引退期（例年 5 月ごろ）の大会では、準優勝かそれに近い成績を収めてきました。しかしながら、このような大会に出場するチームはレベルにばらつきがあり、また出場チームも毎回一定ではないため、大会ごとにレベルが異なり、自分たちの成長度を測る目安としてはふさわし

いまも5月に「高校生女子フットサルチャンピオンシップ」として開催

■ 卒業生とのつながり

蹴球部創部 80 周年の 2004 年に、卒業生の組織である桐窓サッカー倶楽部からシュート板が寄贈されました。

114 ～ 116 回生の 2005 年夏合宿は、3 年生もフルに参加しました。そこに 111 回生の女子部創設メンバーも OG として来てくれました。卒業生がいろんな活動に関わってくれる風土が、この部には昔からあります。

■ グラウンドの芝生化？

それから、半分遊びではありますが、グラウンドの芝生化にも少しだけ挑戦してみました。JFA のグラウンド芝生化プロジェクトの方を知人経由でご紹介いただき、畳一畳分ぐらい、国立競技場と同じティフトンという芝生をしばらく育てていました。毎日水をやり、伸びてきたら散髪し。けっこういい感じになってきたけど、夏の終わりにちょっと油断していると、あっという間になくなっちゃいました。

ここに写ってる 116 回サッカー部主将が本日来てくれています。彼は高校生のころ、DUO リーグ会議、大人の会議に、高校生オブザーバーとして毎回参加していました。高校生の参加を呼びかけてはいましたが、ほぼすべて参加したのは彼だけですね。114 回生のころに総合的な学習の時間がはじまり、本校では 3 年時に「金曜スタディ」の名称で取り組み、卒業論文的なものを書くようになりましたが、彼は DUO リーグをテーマにまとめました。

柳井さん、コメントをお願いします。

116 回生のコメント

柳井：116 回の柳井です。僕らは 113 回生ぐらいから競技志向の強い、いわゆるサッカーチームっぽい雰囲気だったんだろうなということを、先輩方の話をお聞きし、また後輩たちの話からも感じています。先ほどの「夏まで残る」話で言うと、僕らの学年は 10 人いましたけど全員そのままやっていました。本当にサッカーが上手くなろう、勝とうと思いながらやっていた年代かなと思います。

DUO 会議に参加させてもらい、僕も非常に勉強になりましたし、DUO リーグにはすごく近い距離でいました。僕らは初めて DUO リーグで優勝したんですけど、配られた年表にそれが書いてないってことだけ、不満として先生に申し上げておきたいなと思っております (会場笑)。

部活動で学んだことでは、自分がサッカーを一所懸命やり、サッカー部の中で一所懸命練習して存在感を出していくと、「じゃあおまえちょっと DUO 会議参加してみるか」という話になったりします。芝生のお話もそうで、こういうところに呼んでいただけるようになります。僕は大学も筑波大学で蹴球部に所属させてもらいましたけど、そこで一所懸命やってきたことで、いまになっても「おまえいま何やってんの」と言ってもらえます。スポーツを一所懸命やってきたことが他の場面にも繋がっていくのは非常にありがたいと思っています。たまたま場所が部活動でしたけど、スポーツを通じて学んできたことかなと思っています。

本当に「金曜スタディ」含めていろんな場面で、サッカーだけじゃない面白いことをやらせていただいた 3 年間だったなと思います。

中塚：ありがとうございます。この学校では 5 年に 1 回ぐらい担任が回ってくるので、担任学年とは部活動以外でもいろんな形で関わることが多かったなと思っています。

3．校内的な承認以降 －安定と停滞（2009 ～ 24）

116 回の次の学年が 117 回。先ほどのスライドにもありましたけど、当初は完全に「サル」でした。その彼らが 3 年間で「人間」に成長したということを、彼ら自身が自覚した学年だったと思います。

学校の正式な卒業式後にサッカー部で卒業式をやるんですけど、その中で 117 回のある卒業生が、「先生、サルだった僕たちを人間にしてくれてありがとうございました」と言って卒業していったのを強く覚えています。

その次の学年からなんです。時代の節目ははっきり見えるものではない、むしろ曖昧なものだろうと思います。少しずつ少しずつ、いろんなことが変わっていったのでしょうけど、もし節目として設けるなら、校内的な承認、これを 117 回生たちが頑張って求めたあたりかなと思います。

それまで校内的には、サッカー部の中に競技志向のアスリート部門と、プレイ志向のフットサル部門、女子部門があるという形でした。各部門は承認された部ではないので、実質的な顧問は私だけです。ちゃんと承認してもらえるとさまざまなメリットがあるということで、フットサルも正式な部になり、女子も部として自立し、各部に顧問がつくようになりました。校内向けの話ではありますが、そういうメリットを考えた 117 回生たちが頑張ったのはたしかです。

校内的な承認以降
安定と停滞（2009～24）

- ◆118～123回…人数多いがコミュニケーション不足
  諸課題噴出
- ◆124～128回…諸課題山積
  - 126回 「ゼロからのリスタート」
  - 127回 中塚は担任長に。部活は生徒主導で
  - 128回 「生徒主導」の可能性と課題
- ◆129回以降…コロナ禍による断絶。顧問の代替わり
- ◆そしていま…
  参考）高校2年生は「134回見込」

そのころはよかったんです。けど何でもそうですが、「あるのが当たり前」になってくると依存傾向が強くなり、徐々に様子が変わってきます。その先はスライドにあるとおりです。私自身もおっさんになってきて、生徒との距離感を感じるようになったのもあると思います。

ここから先のことを駆け足で見ていきたいと思います。

■ チャリティフットボール

こんなこともやってたんですね。けど、生徒ではなく教員が主導です。生徒たちがこういうことを思いつくことはありません。東日本大震災のときのことです。春休みの部活はできなくなったんだけど、4月3日から活動できるようになり、初日のイベントには卒業生が大勢集まりました。1日で20万円の寄付が集まり、被災地支援のNPOに寄付しました。チャリティーフットボールはその後も何度かやっています。2014年8月には豊島区のNPOと連携して、被災地の中学生を招待してサッカーをやりました。彼らの校庭には仮設住宅が建っているのでサッカーができない状況だったんですね。123、124、125回生になる学年がいたころの話です。

これは合宿の様子です。3部門が集まってかなりにぎやかです。2015年夏合宿の右端は、フットサルや女子の部門をみてくれている速水先生ですね。

■ 校外ラン禁止？

こんなものも出てきました。2015年度「ねずみ坂使用に関する基本方針」という文書です。主将責任者会議名で出ています。ねずみ坂というのは学校の近くにあるいい坂で、各部がトレーニングでよく使わせてもらっています。サッカー部は週20本走らないと週末の試合に出られないので、空き時間をみつけてよく走っていました。この文書の最初のところを読み上げると、「昨年、通行人に迷惑をかけたことにより使用禁止となっていた」とあります。「同じ過ちを犯さぬよう、以下の基本方針を確認する」ということで、全ての部活動の主将責任者会議で合意したものです。

実は2011年度にも「校外ラン禁止」がありました。全く同じ理由です。学校外の公道を走っていたある部の生徒が通行人と接触し、その場で「ごめんなさい」を言えばいいのに言わずにいなくなった。「けしからん！」という通報が学校にあり、それを機に校外ラン

ができなくなった事件です。

120 回のクラブ長兼主将責任者会議の長をやっていた平塚大輝くんがルール作りに力を注ぎ、何とか校外ランができるようになったのですが、また再発したというのが 2015 年度の文書です。生徒の変化はもちろん感じますが、同時にこのころから、学校や部活動に対する社会の眼差しの変化があることを感じます。コミュニケーションの質の変化。その場で怒られておしまいにはならないんです。ぶつかられた方もその場では何も言わず、学校に通報する。SNS が出てくるより前にあったことです。

生徒の側からすると、怒られそうなことは先回りしてもうしない。だんだん小粒になっていった時代と言えるでしょうか。121 回の遠山さん、いかがでしょう。

筑波大学附属高等学校

ねずみ坂使用に関する基本方針

2016 年 3 月
主将責任者会議

これまで、トレーニングに利用してきたねずみ坂だが、昨年、通行人に迷惑をかけたことにより使用禁止となっていた。同じ過ちを犯さぬよう、以下の基本方針を確認する。

一. ねずみ坂は公共の場所である。使わせていただいていることを意識し、挨拶を心がける。
二. 絶対的に歩行者優先である。歩行者がいる場合は走らない。登っている間に新たに歩行者が来ることもあるので注意する。特に先頭を走る場合は前方を意識すること。周囲への声かけも大切である。
三. 下りは一般の方が通らないところを使用する。上から見て一番左の坂が最も適していると思われる。
四. 下りはスピードを出さず、速くてもジョギング程度とする。
五. 横に広がらない。一列で走り、競争は禁止する。追い抜かないように走る順番を考える。
六. 周りには住宅が多い。騒音となるようなかけ声や大声は出さない。ただし挨拶はしっかりすること。
七. 学校が終わってすぐの時間は、小学校の下校と重なることがある。注意すること。

歩行者、特に高齢者や小学生は自分たちが思っている以上に恐怖を感じることがある。このことを心に留め、安全に十分に配慮し、トラブルを起こさないよう、トレーニングを行いたい。

■ 120 回代のコメント

遠山：121 回の遠山と申します。校外ランのことで言うと、一つ上の平塚さんがすごいがんばってせ復活させたという話は聞いていました。当時は校外ランができるようになったんですけど、すごい努力されたんだなと改めて思いました。

部活動で学んだことは、自分の中では「周りをみろ」と言われたことがいまに生きているかなと思います。試合の中でサッカーとして周りを見るだけでなく、普段の練習のときでも、次の練習これだからコーンを準備したりボール用意したりということがあるんですけど、その中でお互い見合って誰も動かないことがあった時に、周りの人が何をしようとしているのか、自分がいま何をすることを求められているのかを考えるくせをつけていただいたなと思っています。

あと、自分としては「迷ったらやれ」という言葉は、その当時は、迷ってるのに何でやるんだろうと思ったりはしたんですけど、いまになって思うと、迷ってるぐらいだったらやった方がいいと思っています。自分自身、理系の大学院で修士まで行って、就職が決まって内定式まで行ったんですけど、博士を取ろうかどうか迷ったときには、これ本当なんですけど、「迷ったらやれ」っていう言葉が頭に浮かんできて、内定を辞退して博士に進学して、いま研究に携わっています。自分が研究者になるなんて思ってもみなかったんですけど、思い返してみると高校時代に言われていたこと、考える癖っていうのがいまに生きているんだと思います。

中塚：ありがとうございます。この頃の高校生が実はもう 1 人います。いまマイクを持ってあちこち回ってくれている皆川さんは、サッカー部ではありませんが 122 回の卒業生です。

皆川：122 回の皆川です。私は中学校から筑波に入って中学は陸上部で、その頃熱血の顧問の先生がいらっしゃいまして、つらい練習があってもやっていたことを思い出すと、いまある課題が序の口に見えるというか歯を食いしばってやった経験が今に生きているなと思ってます。なかなかフィジカル的につらいことって大人になるとないと思うんですけど、その頃の思い出をバネにいま頑張れてるなと思います。ありがとうございます。

中塚：いきなりの無茶ぶりですがコメントありがとうございました。

近年の話題

このあたりになってくるともう最近の話になってきます。

2018 年 1 月の第 5 回東京都女子ユースフットサルフェスティバルが、東京中日スポーツで取り上げられました。冠スポンサーとして SHIBUYA109 が付いてくれたころです。U-18 女子大会がとても華やかに展開されていましたが、この後、コロナになり、冠スポンサーも離れてしまいます。

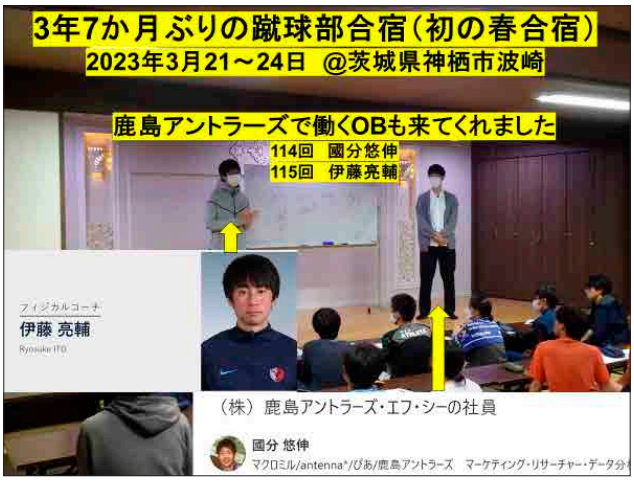
それどころか活動できない時代があって、湘南高校との定期戦はオンラインのみ。それがようやく 4 年ぶりに再開。そして波崎の合宿は夏ではなく春に開催。春合宿には、鹿島アントラーズで働く 2 人の OB が来てくれました。

復活した校内フットサル大会は、コート面でやっています。夏の陣と秋の陣。ギャラリーはいっぱい集まってくれるんだけど、1 面だけなので出場チームは限られます。ついこの間終わった大会の様子です。高校 2 年生は昨日まで修学旅行で沖縄に行っていましたが、修学旅行前の決勝戦の様子です。

この企画運営をした現クラブ長が来ています。部活動で学んだことを言えるような立場にはないと思うけど、ここまでの先輩の話を聞いての感想を聞かせてもらいたいと思います。

現役高校生のコメント

志村：いま高校 2 年生で、順調にいけば 134 回卒業となる志村です。僕が高校の部活で学んだこととしては、やっぱり勝つ楽しさです。全力で遊んだ結果、勝てるっていうのは、非常に大きかったなと思って



います。僕はフットサル部に所属しているんですけど同じ学年の部員がいなくて高校２年生は僕１人です。このスライドは今年の２～３月の大会で、１つ上の先輩と一緒に出場した大会で、初めて東京都の高校の中で優勝することができました。当時僕は１年生１人だけで、先輩に何とかついていくという状況だったんですけど、ここで初めて全力で試合に取り組む、全力で楽しむことを実感できました。僕がフットサル部に入ったのは、競技志向というよりもどちらかというとプレーを楽しむことを目標にして入ったんですが、楽しんで結果も伴ってきたのが、自分の中でいい経験になったと思います。

代替わりして僕が主将になって、いまチームでは「楽しんで勝つ」という目標を掲げています。やっぱり楽しんで試合や練習しないと、部活に取り組んでいることが実感できないというか、楽しくプレイして勝ったときの喜びは非常に大きいものがあると思います。それを１年生と共有してできるように、楽しみながら頑張っていきたいです。

中塚：ありがとうございます。その１年生が隣にいるのでひと言。

中川：1年生の中川です。いま志村さんが「楽しく勝つ」っていうことを言ってくれたんですけど、実際に今年の11月４日に試合があって、そこでも実際にみんなで頑張って、楽しく勝ってということができたので、その試合が1、2年生だけの初めての試合だったので、そこで記憶に残るような結果が出せたっていうか、そういう楽しみ方ができたっていうのがすごく良かったです。これからも楽しくフットサルやって楽しく勝つことができたらいいなと思っています。

中塚：最近の様子を写真で少しだけ。11月３日に本校体育館で行われたU-18女子フットサルリーグの様子です。11月17日にはグラウンドで、新人戦の地区大会がありました。黄色ユニフォームの筑波大附は11人いますが、対戦相手の都立高校は７人しかいません。部活動の危機は身近なところに来ています。聞くところによると、この学校の野球部員は１人だそうです。

クロージング

■演者からのコメント

中塚：だいぶ時間も経過しました。まだまだいろいろあるんですが、ここまでの話を聞いて、高橋さん、朝倉さんから感想などをいただけたらなと思います。いかがでしょうか。

高橋：やっぱり部活は学ぶことがすごく多いですね。私も毎年のように、高校のOB会のようなところに参加すると、温度差があることを感じます。私は最近の人は異星人として理解しています。息子であろうと全く理解ができる存在ではないという前提で捉えてます。

聞いていると、一つの活動に対しても全く違う思いとか、全く違う考え方を持っている。振り返ってみると、おまえそんなこと考えてたのか、とかですね。でもそういう人たちで生きていくときに、この非日常の夢中の場っていうのは、また組織化がされてない部分、生身でモロにぶつかって悩んでっていうところで、いい鍛錬の場になっているんじゃないかなと思います。イギリスのスポーツでも、ミドルマネジメント育成のための非常に重要な場になっていましたので、日本の部活もそれに準じた役割を果たして、それぞれが大きな収穫を得ているんだなという印象です。

自分自身を振り返ってみると、部活のことしか覚えてないかもしれないですね。中学、高校、大学もかもしれません。

中塚：朝倉さんどうぞ

朝倉：卒業生の方々にいろんなお話を聞いて、考えさせられるとともに、私が学ぶことも多かったな思っています。クラブって、実は社会学事典にも出てくる学術用語として使われるんです。何でそうなのかというと、スポーツだけでなく、クラブっていたるところにあることに皆さん気付くと思うんです。繁華街のクラブもあります。スポーツだけではありません。サロン 2000 の「サロン」っていう集団も、社会にとって重要視されるんですね。

なぜかというと、そこで扱われる話とか、あとは人々の関係性というのは、人間が作る集団の中でも非常に公共的な意味を持っている。自由な議論ができるとか、自由なやり取りができる場で、こういう場は意外になかったりするんだけど、そういう機能をクラブやサロンが持っていたと。

部活動って結局クラブの活動する場所だと思ったときに、小学校でもバスケットボールクラブとかサッカーのクラブってあるし、中学校でも部活動というクラブの活動があるし、今回特に注目していた高校のクラブですよね。小学生が作るクラブ、中学生が作るクラブ、高校生が作るクラブとあって、クラブの質は高まっていくと思うんですけど、まさに、高校生が作るクラブってこんなこともできるんだということをすごく感じました。

中塚先生がつけてくれた膨大な資料の中で、例えば「鈴木さんからの提案 サッカー部員の皆様へ」っていうのも、自分はこういうクラブを作りたいっていうのを意思表明し、それを実現しようとしたりしています。また、校内フットサル大会を運営するというのも、先ほど私がお話した、自分たちのためだけじゃなくて、みんなのためになるようなことをする。原点は、自分が遊びたい、楽しいことがしたいということですけれども、そうやって学校とか他の人のためにと繋がっていくのがいいクラブなんだとしたときに、附属高校の、高校生が作るクラブというのは、モデルになるようなクラブだと思います。「部活動」って名前がついていますけど、クラブなんだなというのをすごく感じているところです。

こういうクラブがあるんだというのを、研究者の立場からすると、もっともっといろんなところに発信されていくといいなと感じました。

■ コーディネーターからのまとめ

中塚：ありがとうございます。残り時間がだいぶなくなってきましたけど、皆さんの手元にお配りした私の配布資料の最終ページのスライドのところだけ駆け足で、今日のまとめとして共有しておきたいと思います…

私が着任した当時からみると、サッカー界は大きく変わり、生徒もずいぶん変わってきました。

学校の様子も変わってきました。はじめのころはただ「自由な校風」と言っていました。「教科指導に専念できる」と思って都立高校から異動してきた先生も多かったです。「生徒指導はしなくていい」と言い切る教師もいました。教科王国、学級王国、学校行事は生徒部の担当者任せ、部活動はほったらかし…。着任したころは多くの部活がこんな感じでした。その分、自由度はすごくあったのかもしれません。卒業生との非常に濃いパイプで、100 年のうち 70 年ぐらい続いてきました。

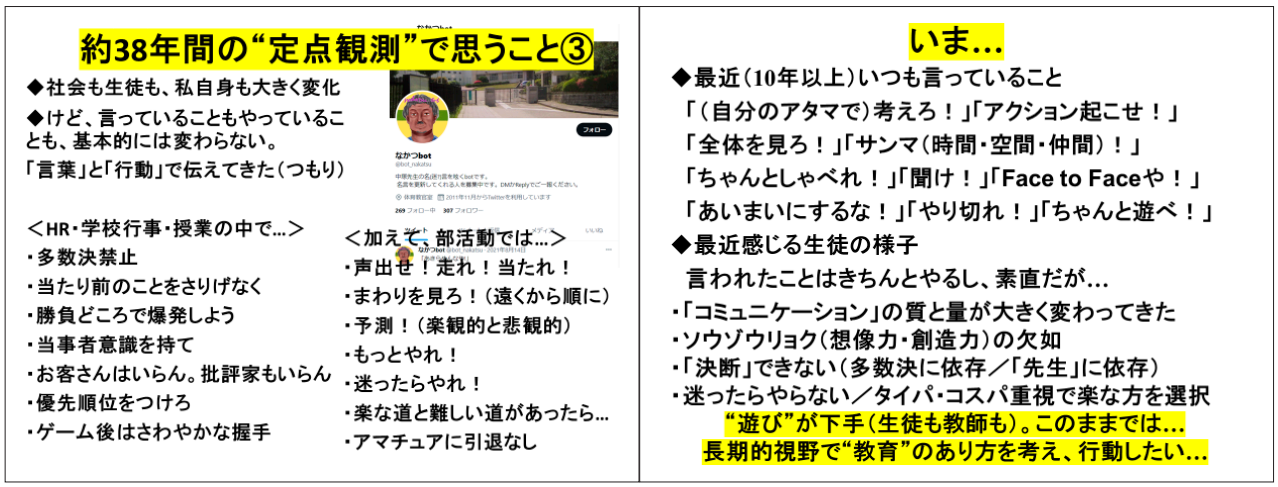
1990 年前後に、「自由な校風」に自主・自律をつけて「自主・自律・自由」と言うようになりました。

約38年間の“定点観測”で思うこと①

◆着任当時（1987）:「自由な校風」と言ってはいるが…
・集会に象徴される無秩序ー何もしない教師と動かない生徒
・「自治会検討委員会」は熱心に議論している。しかしそれは一部
・「教科指導に専念できる」「生徒指導はしなくていい」と言い切る教師
・「教科王国」ー教科間の連携なし
（ただし「飲み会」は結構あり。生徒の話をよくしていた）
・「学級王国」 → 「学年（担任団）王国」（他学年は口をはさまず）
・学校行事は生徒部or担当者任せ
・部活動は放ったらかし（卒業生が仕切る／熱い教師が切り込む）
↓
◆「自主・自律・自由」と言い換えた（1990前後）
◆附属学校の存在意義が問われる（「反対」ばかり言ってられない）
◆国立大学法人化（2004年度）
◆働き方改革／コロナ禍（2020～21）

約38年間の“定点観測”で思うこと②

◆「いい加減」だったが、「よい加減」でもあった
ーそれなりにバランスはとれていた（不満は多々あるが…）
・やりたい人がやりたいところで力を発揮
・やりたくない人がやらない自由もあり(?)（互いの事情はﾘｽﾍﾟｸﾄ(?)）
↓なすべきことが増えてきた↓
◆みんなで応分に負担／機会均等＝“ふつう”を目指す(?)
・やりたくない人までもが駆り出される。
もともとやりたくないから、「ここまでなら」の線引き
・ルールやマニュアルが詳細に（「ここに書いてあるから」が根拠）
ルールやマニュアルへの依存傾向が高まり、現場で考え、行動することができなくなっているのでは…
「自由」の喪失
◆「働き方改革」「コロナ禍」が追い打ちをかけた
→ 今後が心配 → 日ごろからのコミュニケーションを！



附属学校の存在意義が問われるようになり、国立大学は法人化します。働き方改革やコロナ禍もありました。

38 年間を振り返ると、最初の頃はすごくいい加減だったけど、それなりにバランスが取れていたのかもしれません。教員の方も、やりたい人がやりたいところで力を発揮していたのだと思います。逆に言うと、やりたくない人はやらない自由があったのではないか。それを皆で応分に負担しようとして、やりたくない人までも駆り出され、元々やりたくないから「ここまでなら」という線引きをするようになり、そのためのルールやマニュアルがどんどん詳細になり、ルールやマニュアルが全てになって自由が奪われる。少し抽象的ですが、皆さんの現場にも当てはまるのではないでしょうか。

「働き方改革」や「コロナ禍」が追い打ちをかけ、今後が心配です。

社会も生徒も私自身も大きく変化しましたけど、言ってることややってることは基本的には変わりません。ホームルームや学校行事、授業の中では「多数決は禁止」だし、「当たり前の事をさりげなく」と言い続けます。これは「勝負どころで爆発しよう」とワンセットです。

配布したもう一つの資料には、ホームルームの生徒向けに言ってきたことをまとめました。「当事者意識」という言葉をよく使います。お客さんいらん、批評家もいらん、優先順位付けろ。これらに加えて部活動で最初の頃に言っていたのは、「声出せ、走れ、当たれ」だけです。周りを見ろ、予測、もっとやれ、迷ったらやれ、それから「楽な道と難しい道があったら難しい道を選べよ」ということも言いました。いまでもずっと伝えていることですが、ここ 10 年、表現が少し変わっています。

「サンマや」「ちゃんとしゃべれ」「聞け」「フェイストゥフェイスや」「あいまいにするな」「やり切れ」「ちゃんと遊べ」…

言われたことはきちんとやるし素直ですが、コミュニケーションの質と量が大きく変わり、ソーゾー力（想像力、創造力）欠如、自分で決断できない、迷ったらやらない。タイパ、コスパ重視で楽な方を選択…。

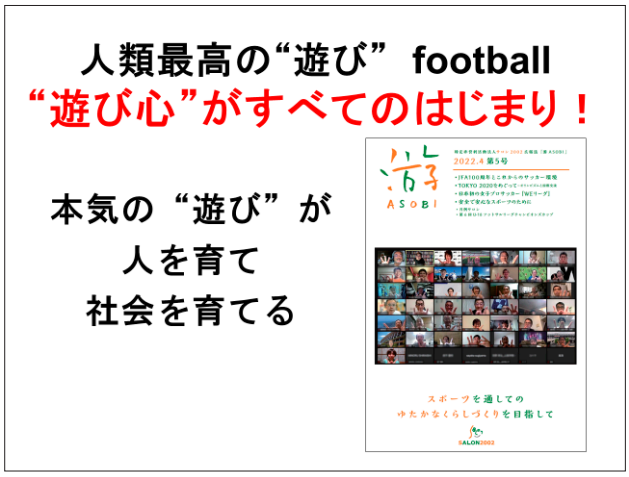
これは生徒だけじゃなくて教員も同様です。だけど、これをやらないと働き方改革にならないのも確かです。

遊びが下手くそ、このままでは…

長期的な視野で教育のあり方を考え、行動していきたいなと、改めていま思っています。

“遊び心”が全ての始まりです。

本気の遊びが人を育て、社会を育てる



ということで 2 時間半、結局ノンストップになってしまいましたが、一旦締めたいと思います。

最後に、今回のシンポジウムにご後援いただいた桐窓サッカー倶楽部会長の菅原さんがお越しいただいていますので、ひと言ご挨拶をいただければと思います。

菅原：菅原です。よろしくお願いします。先生ありがとうございました。ご苦労さまでした。

なかなか興味深い話をありがとうございました。部活のあり方もそうなんですが、OB 会のあり方を真剣に考えていきます。以上でよろしいでしょうか。

中塚：ありがとうございました。日本部活動学会にもご後援いただいています。会長の神谷先生はオンラインでご参加でしたが途中で退出されたようです。

以上で締めたいと思います。高橋さん、朝倉さんは、この後の懇親会も大丈夫ですよね。では同じ場所で、今度は飲み食いしながら、もう少しざっくりと話ができればなと思います。

ご登壇くださった高橋さん、朝倉さん。ありがとうございました。ご参加くださった皆さんもありがとうございました。

第 2 部の資料・写真等は、出典・提供者が明記されているものを除いて中塚義実所蔵・提供。

補足① 108 回生　白根昌和氏の事前アンケートより

● **高校時代の部活動を通じて身につけた思考や行動が、今も役に立っていると感じることはありますか。それはどんなときですか。**

とても役に立っています。むしろ、私の人間形成は高校時代の部活動だった。と、そのエピソードを社会に出て話す機会が多いです。そして、その感想は、「部活の概念を超えてる (笑)」というものが多いことに驚きます。

印象的なのものとしては、「自分勝手と自由の違い」なのかと思惟します。

中塚先生の指導方針は、具体的な戦術を逐一教え、型に嵌めることはなかったのですが（筑波大式 C 点は今でも覚えています。）とにかく、課題が見つかれば「その場で話し合え！」というスタイルでした。そしてある日突然問題解決につながる難解なヒントとなる言葉を教えてもらい、チームが止揚していく。というプロセスを踏んでいたのだと思います。それは、「(ある程度) 自由にプレーしていいけど、（チーム内の）自分のプレーに責任を持ち、そして（仲間と）議論しながら発展させよ。」と言い換えられるのかと思います。これは、現在「答えのない問題を解く」ことが課題とされている時代においても、とても貴重なトレーニングだったのだと思います。

私自身は、高校入学当初はサッカーのイロハもわからず自分勝手なプレーを「自由にやらせてもらえない。なぜ怒られるのだ？」と履き違え、しかし徐々にマナーやルールが理解でき、仲間と議論しながら解決策をトライアンドエラーで模索する中で、「自由にするためには責任が多い」ことを学びました。

現在、アーティストという自由業を営んでおりますが、高校時代の部活動を通して「自分勝手と自由の違い」を意識できていなければ、本当に社会的には破滅者になってしまっていたかもしれません。社会上のマナーやルールを尊び、プロジェクトメンバーと議論しながら、その上で責任を持って自分のやりたいことを自由にやらせてもらう。言葉で書くと当然のことのようですが、上記を主要五科目の勉強の中からや大学で、怒られながら口酸っぱく言われる実体験の場はあるでしょうか？

そう考えると、高校時代の部活動がいかに自身の人間形成に役立ったのかと中塚先生をはじめ、108 回生の同級生に感謝いたします。

● **高校時代の部活動で言われた言葉で、今でも心に残っているキーワードはありますか。それはどんな言葉ですか。**

二つあります。両方とも一年生の時（生意気な時）だったと思いますが、

・「暗病反男」

・「サッカーには攻撃と守備時の両方に楽観的な時と悲観的な時がある。しかし、白根は攻撃の楽観的な時しかプレーしていない。それはサッカーの 1 ／ 4 だ。」

しかし、現在の私の仕事を表していただく際には「明るく、しかも粘り強くプロジェクトに取り組む」と時々仰ってもらえることがあります。ですので、それが強みなのかなと思い、現在ではその姿勢で日々仕事を取り組むようにしています。

表現という仕事は、楽しいことだけでなく、むしろ 8 割くらいは苦しいと思うことが多いですが、残りのわずかな部分の喜びが忘れられず、続けることができています。また、どうせならば苦しいことも楽しもう！と明元素漢として振る舞い、周りを盛り立てようと心掛けています。

いつの間に上記の二つを克服できたのか？（できたのか？？）分かりませんが、サッカーと芸術はとても似ているなと感じることが多くあります。

当然、他にもいろいろありますが、個人的なこととしては上記 2 つが特に挙げられます。

補足② 103 回生　池田知之氏の事前アンケートより

- **高校当時の部活動に対して、もっと改善したほうが良いと思っていたことはありますか。**

質問に対する回答ではないがコメント。親として最近の中高生のサッカー生活を見た結果思うこととしては、必ずしも部活である必要はない、である。我々世代においては、特にチームスポーツを行う場合は、学校の部活以外の選択肢は少なかったため、部活に入るのが当たり前、というか極端に言えばそれ以外の選択肢が無かった。対して現代においては、情報もツールも選択肢も多く、サッカーのようなメジャースポーツの場合は部活以外でサッカーをすることは可能であり、その中からどこでどうやるかを選択すれば良いと考える。確かに部活は学校とセットになっているので、入りやすい、多くの場合授業後に移動も不要、金銭的な負担も少ない、等のメリットはある。対して、学外でのチームに所属する場合、部活のメリットはデメリットになるが、学校以外の人との交流、自分のレベル、目的にあったチームに入れる、等のメリットが存在する。部活にしかない特権は注目度の高い高校選手権だろうが（サッカーのレベルはさておき）、そもそも一握りのチームが対象になる話である。スポーツである以上試合に出ることは重要なポイントとして考えており、お互いに刺激しあえるチームメンバーがいて適切な努力を積めば試合に絡めるチームに所属することは大事なことではないだろうか。逆に、どうやってもレギュラー確定、というようなチームに所属することも成長という側面からすると賛同しにくい。何を求めるかは当人次第ではあるが、個人のニーズにあったものを選べることが重要と考えることから、部活である必要はない、となる。

そう考えると、我々世代の多くが経験している、練習がきつい、さぼりたい、という気持ちは非常に時代を表している、と感じる。要は本人が納得しているのか、だと思っているのだが、納得しないままやらされているとなっているのであれば、好きで始めたことなのにおかしな話である。当時の部活は、一生懸命な部活ほど、きつくてつらいもの、というイメージがあったと思う。むしろ、そういう取り組みや姿勢が正しいという美学の様なものがあった。きつさの先にこそ、得られるものがある、という精神論であった。これに対し、そもそも娯楽や趣味を行う情報もツールも多い中で、好き好んでサッカーをやり、且つ選択肢の中から選んでチームに所属しているので、姿勢が全く違うのが現代。勝利を目指すチームにおいても、非合理な、つらい、大変、きつい、は逆に勝利を遠ざけるもの、という理解も広まっている。根性もメンタルも重要だが、根性論、精神論だけでは勝てない。今もそういうチームはあるが、徐々に敬遠され、選手が集まりにくくなっている。息子二人はそれぞれサッカーレベルの違う場所でサッカーをしてきたが、きついから練習行きたくない、とか、練習をさぼる、という発想がない。練習さぼって遊びにいく、はチームメンバーにもなく、そういう発想になるのであれば、そもそも辞めてしまう、そこまでしてやらなくてはならないもの、ではないのが現代。100 人が 100 人そうだとは言えないだろうが、30 年前と今を比較すると、確実にその変化は起きている。これは否定的な意味合いではなく、サッカーに限らず、これが全体的なスポーツのレベルをあげている根底の一つにあるのではないだろうかと私は感じている。これに加え、サッカーに限って言えば、もっと頻繁に小中高年代でチームを変えられる移籍の仕組みと風潮ができれば、もっと全体のレベルは上がっていくのだろうな、と思っている。

これらを附属高校蹴球部に当てはめるとどう思っていたのかは酒の席での話にさせてください。今の高校サッカー部は、いろんな形のチームがあって、俺たちの時代より良いな、とみています。

最後に、これは完全に個人的な見解であるが、部活が進学と生徒集めの手段になっている風潮は何とかならんかな、と思う。サッカーやスポーツをやっていれば、学校、勉強は何とかなるという仕組みは、本来の学校という目的からあまりにも離れすぎていないか？これは部活の嫌な所、ですね。附属高校は当てはまらない所ですが。昔も今も文武両道が、目標に掲げられ、美談になるのは、それが簡単なことではないことの裏返しなのだな、ととらえています。

筑波大学附属高校蹴球部の近・現代史－1987～2024（概要）

2024.11.16.中塚義実

年度	1年	2年	3年	蹴球部顧問				蹴球部のトピック	サッカー・スポーツ界の動き（赤字は中塚関連）
1987	98	97	96	79-00 顧問	中塚義実			年末にグラウンド改修(附属小で練習)	ソウル五輪出場を逃す
1988	99	98	97						
1989	100	99	98					「ｱﾀｯｷﾝｸﾞﾃﾞｨﾌｪﾝｽ」で総体予選都ベスト20(?)	
1990	101	100	99						W杯衛星放送開始（イタリア） ﾌﾟﾛｻｯｶｰﾘｰｸﾞ設立準備室第1回MTG（10月）
1991	102	101	100					102回に女子3名入部。村田女子商業と合同練	W杯招致委員会発足（6月） 社団法人日本ﾌﾟﾛｻｯｶｰﾘｰｸﾞ設立（11月）
1992	103	102	101						ﾔﾏｻﾞｷﾅﾋﾞｽｺｶｯﾌﾟ決勝に56,000人の大観衆！ 「はやくはじまれJリーグ」
1993	104	103	102	伊藤良徳				合宿で「坊主戦」はじまる （京華との合同練習がこのころはじまる）	Jリーグ開幕（5月） 「ドーハの悲劇」W杯出場を逃す（10月）
1994	105	104	103						W杯はテレビ観戦（アメリカ） FIFAが「フットサル」を定める
1995	106	105	104					「好きだからやっている部活動を最後まで」 「引退なしのスポーツライフ」「3年の夏」 桐陰祭で「蹴球部合唱団」編成。大好評	**都高体連ｻｯｶｰ科学研究会発足（～2005）** **各都道府県FAにフットサル委員会設置**
1996	107	106	105					DUOﾘｰｸﾞに2ﾁｰﾑ参加。「院戦」をめぐる大議論 保護者会初開催(以後毎年開催) 部員資格の見直し	**DUOリーグ開幕（1996～2014ﾁｪｱﾏﾝ）** 2002年日韓W杯決定(5月)／アトランタ五輪(7月)
1997	108	107	106					フットサル同好会設立運動・頓挫	**サロン2002発足（2014にNPO法人化）**
1998	109	108	107					フットサル部門創設 校内フットサル大会初開催	W杯初出場（フランス）
1999	110	109	108					夏合宿が「高萩大心苑」から「波崎」へ	**JFA指導者養成講習会・ｽﾎﾟｰﾂ社会学講師(～2012)**
2000	111	110	109	01-03 副校長				女子部門創設（111回生）	TFA主催ﾚﾃﾞｨｰｽﾌｯﾄｻﾙ大会開催（2001年1月）
2001	112	111	110	古寺順一				ﾌｯﾄｻﾙ部門に新入部員（112回生） ﾌｯﾄｻﾙ部門・女子部門が公式戦初参加	**TFA主催U-18ﾌｯﾄｻﾙ大会開催（8月と1月）**
2002	113	112	111					グラウンド改修(2002年4月6日ｵｰﾌﾟﾝ) クラブ長誕生（3部門で活発に躍動） W杯ﾊﾟﾌﾞﾘｯｸﾋﾞｭｰｲﾝｸﾞ等を企画	W杯(日韓共催)ベスト16。ｽｶﾊﾟｰが全試合放送
2003	114	113	112					女子が公式戦初勝利（対ﾊﾛﾌﾟﾛ）(2004年3月) 伊藤良徳先生退官記念行事(2004年3月)	U-18東京都プレリーグ（サッカー）開催（4月） **日本フットボール学会発足（9月）**
2004	115	114	113						**東京都U-18公認リーグ（サッカー）中止！** **東京都高体連研究部発足　国立大学法人化** **JFAﾚﾌｪﾘｰｶﾚｯｼﾞ・ｽﾎﾟｰﾂ社会学講師(～2015)**
2005	116	115	114						Tリーグ（都U-18リーグ）発足
2006	117	116	115	04着任 04-05 剣道部				「コンビニ事件」勃発(11月)	W杯出場（ドイツ） 「Eリーグ」(DUOの上位ﾘｰｸﾞ)発足
2007	118	117	116						Fリーグ（フットサル全国リーグ）開幕（9月） 都U-18ﾌｯﾄｻﾙﾌﾟﾚﾘｰｸﾞ開催
2008	119	118	117			藤本和哉		3部門の独立＝校内的な承認 注）フットサルと女子は1年限定で「同好会」 「DUOﾘｰｸﾞのﾄﾛﾌｨｰがない」→ﾄﾛﾌｨｰ完成（7月）	第1回都U-18ﾌｯﾄｻﾙﾘｰｸﾞ（4月） 自主企画の女子高生ﾌｯﾄｻﾙ大会（12月） **茗友ｻｯｶｰｸﾗﾌﾞ理事長（2008～17）**
2009	120	119	118					フットサルと女子が「部」となる	**全国高体連研究部活性化委員会（08～19委員長）** 注）2008は活性化プロジェクト
2010	121	120	119					2011年3月11日に東日本大震災⇒湘南戦中止	W杯ベスト16（南アフリカ） 「Eリーグ」ﾗｽﾄｼｰｽﾞﾝ。地区ﾄｯﾌﾟﾘｰｸﾞにDUO直結 **筑波大学に五輪教育の組織(CORE)設置**
2011	122	121	120					ﾁｬﾘﾃｨﾌｯﾄﾎﾞｰﾙﾌｪｽﾀ開催（4月3日） 「校外ラン」禁止を経てルール化	なでしこジャパン世界一！ DUOから上位までU-18リーグがつながる **U-18ﾌｯﾄｻﾙの全国プレ大会（12年3月）**
2012	123	122	121					ｻｯｶｰ部・選手権都大会進出	**都女子ｺｰｽﾌｯﾄｻﾙ・ﾌﾟﾚ大会（13年3月）** **『高校サッカー90年史』発行（7月）**
2013	124	123	122			浅見道明		桐陰祭：3部門で演劇に挑戦	
2014	125	124	123					校内ﾌｯﾄｻﾙ大会・運営面の不手際で中止 南三陸町立歌津中招待ｻｯｶｰ(8月) 卒業生有志による現役支援開始	W杯（ブラジル）出場 第1回JFA全日本U-18ﾌｯﾄｻﾙ大会
2015	126	125	124	速水高志				グラウンド改修 105回以来続いた桐陰祭への団体参加をせず サッカー部は「ゼロからのスタート」	
2016	127	126	125			物井真一		校内ﾌｯﾄｻﾙ大会再開	**U-18ﾌｯﾄｻﾙﾘｰｸﾞﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｽﾞｶｯﾌﾟ開催（17年1月）** **筑波大学蹴球部創部120周年**
2017	128	127	126					桐陰祭：3部門で演劇に挑戦	**日本部活動学会発足（12月）** 都女子ｺｰｽに「渋谷109」が冠に（2018年1月）
2018	129	128	127					**＜公式戦出場100周年＞**	W杯（ロシア）ベスト16 **『高校サッカー百年』刊行**
2019	130	129	128				18着任 馬術部	校内ﾌｯﾄｻﾙ大会断絶 2020年3月：湘南戦中止	自主企画の高校生女子ﾌｯﾄｻﾙﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｼｯﾌﾟ（5月）
2020	131	130	129			小松俊介		3ヶ月の休校。オンライン授業導入 部活動中止～制限付(1年生の入部は7月) 2021年3月：湘南戦はｵﾝﾗｲﾝ交流のみ	新型コロナのパンデミック 高校総体中止。TOKYO2020延期
2021	132	131	130			物井真一	三輪直也	コロナ下で多くの制限あり 2022年3月：湘南戦はｵﾝﾗｲﾝ交流のみ	東京でオリパラが無観客で開催 WEリーグ開幕（9月）
2022	133	132	131					校内ﾌｯﾄｻﾙ大会再開（2023年1月） 2023年3月：湘南戦再開／春合宿実施	W杯（カタール）ベスト16。ABEMAで配信
2023	134	133	132					ﾌｯﾄｻﾙ部・東京都ベスト4（2024年1月） **＜創部100周年記念行事＞2月23日**	コロナの5類移行。Afterコロナの時代へ。 東京都U-18女子ﾌｯﾄｻﾙﾘｰｸﾞ開幕 部活動の地域移行元年
2024	135	134	133					コロナ制限撤廃	高校総体サッカーは福島(男子)、北海道(女子)で開催